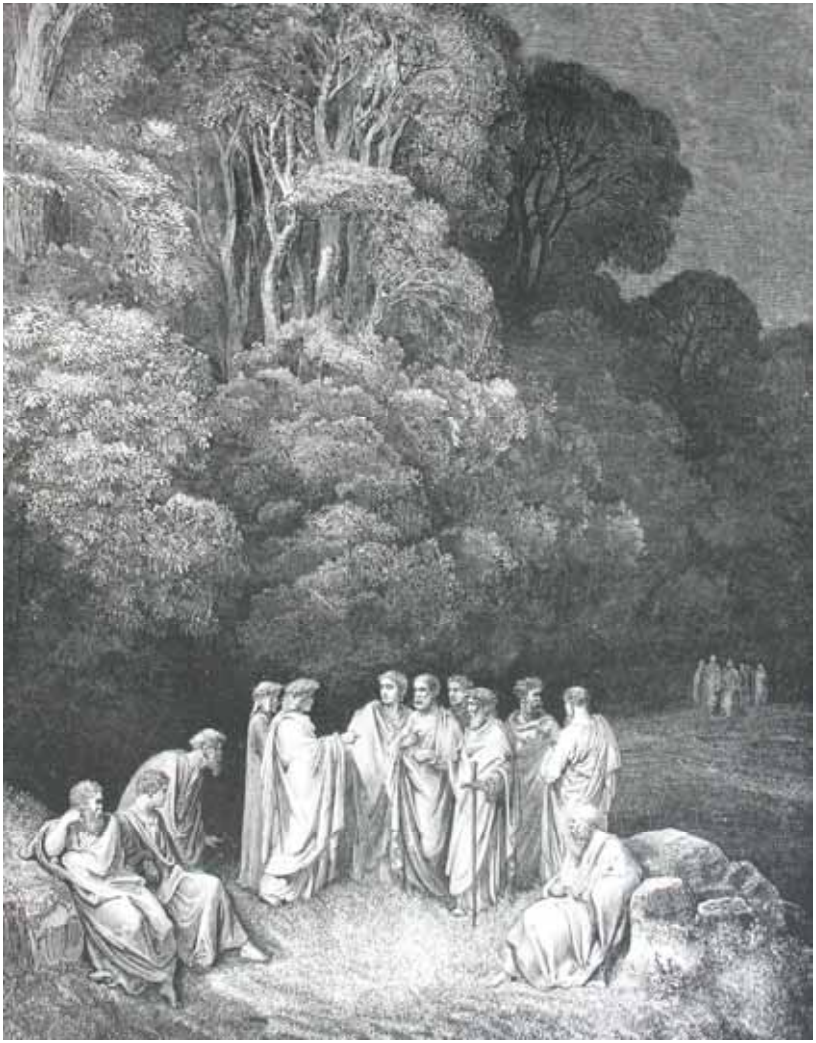
VIRGINIBUS　PUERISQUE

（若き人々のために）

――「読書マラソン」への誘い――

［第３版］



So I beheld united the bright school
Of him the monarch of sublimest song,
That o'er the others like an eagle soars.

ヴィルギリウスに導かれるダンテと森に集う賢人たち（ホメロス、ホラティウス、オヴィデウス、ルカヌス、アリストテレス、プラトン、ソクラテスら）

出典: *Canto IV.*, *lines* 89－91, "DANTE'S VISION, The Vision of Hell" translated by Henry Francis Cary and illustrated with the designs of Gustave Doré (New Edition), CASSELL & COMPANY, Limited. 製本番号 894 より中 哲裕氏提供.

第３版　序

期末試験のときだけ賑わっている、というのが我が県立大学図書館の入館状況のようです。たしかにテスト勉強に図書館を利用するのは、参考書を探すためにも、そして試験を戦うための同志を見つけるためにも有効なやり方でしょう。しかしこの期間だけ利用していると、図書館のオアシス的役割、毎日の生活の慌しさから癒してくれるという効果を知らないままでいることになります。普段図書館や読書から縁遠い人は、たとえ本を手にしなくてもよいから、しばらく館内で時間を過ごしてみる、例えば奥のソファーで休んでみるとよいでしょう。本の背表紙に見つめられながらぼーっとしている経験を重ねると、本の方でもいつか親近感をもって誘いかけてくれるはずです。

日々の生活から一歩離れた空間にいる、という感覚は読書の環境としてのみならず、本の内容理解のためにも大事な条件です。また読書すること自体が否応なしに皆さんを今そこにいる状態から、別の世界に連れて行ってくれます。なるほど友人たちと一緒に遊んだり、ワイワイ騒いだりするのが最良の息抜きだと言う人も珍しくないでしょう。しかし一人になって歓談を振り返ったとき、仲間たちと大事な点で考えが一致していると確信を持って言えますか。人生観、社会観になると、真の友人と言えども、意見の一致を見ることは少ないでしょう。そもそもこれらをテーマに話をすることがどれほどあるでしょうか。また、一人で楽しむ静かな趣味を持っていることも日々のストレス解消のために大変好ましいことですが、多くの場合それによって人生や社会に対する不安や疑問は少しも解消されないことは言うまでもありません。

皆さんの側に少しの忍耐と根気があれば、皆さんが抱えている学生生活上、

人生上、あるいは社会上の疑問や希望に対して助言を与えてくれたり、励ましてくれる本が必ず見つかります。皆さんの仲間たちが、あえて口にしないようなテーマや欲求に対しても、有効な助言や示唆を与えてくれる本が必ず見つかるでしょう。現実世界の中で、皆さんに共感や同意を示してくれる人がいなければいないほど、あるいは学内に皆さんと付き合う人がいなければ、それだけますます本の語る言葉は皆さんの心の琴線に触れてくるはずです。読書の喜びと力はそもそも孤独な人、または孤独を確保した人のためにあります。

赤本『若き人々のために』は、教養教育の教員が皆さんの年代の人たちが読んだら、人生上、学生生活上の励みになるのではないかと考えて、それぞれ数冊ずつ選んで解説をつけたものです。この中には教員自身の若い頃の愛読書もあれば、最近出版されたものの中から皆さん向けに選ばれたものもあります。本との出会いは人との出会いと同じで、ある人にとっては馴染めるものも、別の人にとっては違和感があったり、ある人にとっては共感者になってくれるものが、別の人にとっては批判者になったりします。いずれにしても相性が合わなければ読書途中でも放り捨て、他の本に向かった方が良いでしょう。最適な本、最良の助言者としての本に出会うためには、ある程度出会いの回数を重ねなければいけません。例えばここに挙げられた本を手始めに、できるだけ多くの本に接してください。読者が若いとそれだけ多くの本が誘ってくれます。たくさんの誘いに乗って、最良の伴侶を見つけてください。

2012 年 8 月　　中川　佳英

初版・第２版　序
―より深く、より豊かな人生（いのち）を生きるために―

かつて、若い人々が読むことが望ましいとされていた本がありました。そして、テレビや映画といった映像分化、インターネットの発達による多様な情報メディアの存在する現代においても、「読書」が若い人々に求められていることはいうまでもありません。

経済的・物質的な豊かさ、多様化した価値観の中にあって、私たちが今どの地点に立っているかを見極め、どのような目的に向かって進むべきかを考え、主体的に行動していく力を持つことが求められています。生涯にわたって、様々な形で提供される膨大な情報の中から自ら必要なものを見つけ、獲得し、統合していく知的な能力、謂わば「人間力」を培うことが必要となってきます。そして、時代がどのように変わろうとも、そういう力の涵養に、本を読み、考えることが大きく関わってきたということは事実なのです。

今回、私たち教養教育の教員が中心となって、若い皆さん方（VIRGINIBUS PUERISQUE）のために、学生時代にこそ読んでほしい本の目録を作成しました。それは大きく分けて、皆さんが「技術者」として生きていく時に力となってくれる本と、「人間（ひと）」としてより深く、より豊かに生きていく本とに分けられます。

人はたった一つの人生しか生きることはできません。しかし、本を読むことで、多くの人生を擬似的に体験することができるのです。21 世紀の今、日本で生活していながら、日本のみならずアジアや欧米の歴史上の疾風怒濤の時代を生き、冒険に心を踊らせ、激しく苦しい恋を知り、多くの科学者たちの発見の喜びを追体験し、また逆に、先人たちが経験した絶望的な戦争や飢餓・貧困・憎悪の悲惨さをも知ることができるのです。

もちろん、読書によって得られた体験が本当に血となり肉となるのは、皆さんがこれからの人生の一瞬一瞬を切実に生きることによってであることはいうまでもありません。しかし、読書を通じて自己を確立するとともに、学ぶことやよりよく生きることへの主体的な態度を身につけるのみならず、生涯にわたって新しい知識を獲得し、統合していく能力を涵養し、異なる国、世代、性、宗教、言語、価値観、生き方など、自分とは違うものに対する理解を深め、異質なものを尊重し、共感し、共存していく能力を身につけることができるのではないでしょうか。

より深く、より豊かな人生を生きられますことを念じています。

2009 年 1 月　　中　哲裕

（名誉教授・元図書館長）

写真：富山県立大学附属図書館夜景 ・・・・・ 1
第３版　序 ・・・・・ 3
初版・第２版　序 ・・・・・ 5

執筆者一覧（氏名および主要担当科目）
奥田　實 （社会学） ・・・・・ 8
平野 嘉孝 （経済学） ・・・・・ 10
川上 陽介 （日本語・日本文学） ・・・・・ 16
原口 志津子 （芸術学） ・・・・・ 18
岡本　啓 （健康科学） ・・・・・ 20
井戸 啓介 （心理学） ・・・・・ 24
石森 勇次 （数学） ・・・・・ 29
戸田 晃一 （数学） ・・・・・ 31
土井 一幸 （数学） ・・・・・ 35
福原　忠 （物理学） ・・・・・ 38
上谷 保裕 （物理学） ・・・・・ 40
室　裕司 （物理学） ・・・・・ 41
川端 繁樹 （化学） ・・・・・ 43
川崎 正志 （化学） ・・・・・ 46
佐藤 幸生 （生物学） ・・・・・ 48
垣田 邦子 （英語） ・・・・・ 51
D. Berducci （英語） ・・・・・ 54
中嶌　崇 （英語） ・・・・・ 56
須田 孝司 （英語） ・・・・・ 62
中川 佳英 （ドイツ語） ・・・・・ 64

中　哲裕 （国語・国文学） ・・・・・ 67
丸山 義博 （数学） ・・・・・ 71
前澤 邦彦 （物理学） ・・・・・ 73
鈴木 敏彦 （生物学） ・・・・・ 75

書名索引 ・・・・・ 78
人名索引 ・・・・・ 86
索引補遺 ・・・・・ 94

（イラスト=石森勇次）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
奥田　　實（おくだ みのる）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】暗い旅
【著者】倉橋由美子
【発行】河出書房新社（河出文庫）
　恋人の突然の失踪。彼を追い京都への旅、でもそれは過去への旅でもあった。今はなきジャズ喫茶「しあんくれーる」（由来は「思案に暮れる」）がでてくる。

【書名】全東洋街道 上・下
【著者】藤原新也
【発行】集英社（集英社文庫）
　イスタンブールから高野山までのシルククロードをたどる旅。人と文化のドキュメンタリー、写真と文章の叙事詩及び叙情詩。西洋と東洋の文化の違い、宗教の違いが見えてくる。また生と死について考えさせられる。

【書名】赤目四十八瀧心中未遂
【著者】車谷長吉
【発行】文藝春秋（文春文庫）
　１日中モツの串さしを行う、日給 3,000 円の住み込み生活。そこからの脱出は背中に刺青をした女との逃避行及び心中。

【書名】沖で待つ
【著者】絲山秋子
【発行】文藝春秋（文春文庫）
　同期の新入社員同士の友情と恋愛。ある秘密の協定をした二人、そして悲劇。

【書名】レディ・ジョーカー 上・下
【著者】高村薫
【発行】毎日新聞社

この小説の根底には、「グリコ森永事件」がある。企業の闇の部分、裏社会とのつながり、さらに、日本の差別構造が描かれている。たんなるサスペンスを超えた文学である。

頭脳の休憩にミステリー（ハードボイルド）のお薦め

ハードボイルドでは私立探偵が活躍する。生き方がとても「かっこいい」。なんと言っても、レイモンド・チャンドラーが描く私立探偵マーロウと、チャンドラー研究で博士号をもつロバート・B・パーカーの作品に登場するスペンサー探偵に惹かれる。日本のハードボイルド作家では、寡作だが、原寮が好きだ。原の作品に登場する探偵は西新宿に住む沢崎。壊れかけの古い車を乗り回す。

警察ミステリー小説では、エド・マクベインの『８７分署シリーズ』（早川書房ほか）。毎日発生するさまざまな犯罪に対処していく刑事、警官、警察組織が淡々と表現される。日本では、乃南アサが描く主人公の女刑事音道。男社会でがんばる姿が良い。また、警察組織の暗部をさらけ出す横山秀夫の作品も読み応えがある。最後に、すでに紹介した高村薫の『レディ・ジョーカー』に登場する「合田刑事シリーズ」もお薦めする。

チャンドラーの作品『さらば愛しき女よ』ハヤカワ・ミステリ文庫ほか
パーカーの作品『約束の地』ハヤカワ・ミステリ文庫ほか
原寮の作品『私が殺した少女』（直木賞）ハヤカワ文庫ほか
乃南アサの作品『凍える牙』（直木賞）新潮文庫ほか
横山秀夫の作品『陰の季節』（松本清張賞）文春文庫ほか
高村薫の作品『マークスの山』（直木賞）講談社文庫ほか

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
平野 嘉孝（ひらの よしたか）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】吾輩は猫である
【著者】夏目漱石
【発行】学習研究社（カラーグラフィック『明治の古典』第９巻に収録）

漱石の各小説・随想（例えば、『夢十夜』、『硝子戸の中』など）を読むなら、各出版社から出ている文庫版をお薦めします。寝転がって読むには、文庫本は軽くて都合がよいからです。本書は「猫」の本文に加えて、漱石自筆の絵はがき（カラー）や友人・知人に書き送った手紙・はがきなどがページの随所に掲載されていて、見ても楽しい『吾輩は猫である』。中でも芥川龍之介と久米正雄に送った手紙の一部や、妻ではない意中の女性の死に際して詠んだといわれる俳句が印象的です。しかし残念ながら、本書自体は現在入手困難かもしれません。公共図書館か古本屋で探してみて下さい。

【書名】森林がサルを生んだ――原罪の自然誌
【著者】河合雅雄
【発行】小学館（『河合雅雄著作集』第３巻に収録）

最初、平凡社から単行本が出版され、次いで講談社文庫（学部生の頃、私が読んだのはこの版）に収録され、その後、朝日文庫に出版元が代わり、現在は小学館の『河合雅雄著作集』第３巻として入手可能なようです。かつてのサル学の泰斗による代表作。森林を生活圏にしているサル類は、外敵（天敵）がいない動物であるため、周期的に疫病が発生することで、個体数が調整されているそうです。このような視点に立つなら、医療技術の発展もまた環境負荷を形成していると言えるのかもしれません。サル社会の丹念な観察から、人間社会再考のための視点を提供してくれる好著です。

【書名】世界の十大小説 上・下
【著者】ウィリアム・サマセット・モーム（西川正身 訳）
【発行】岩波書店（岩波文庫）

人は他人のことを語るとき、ありのままに語るのではなく、自分自身の特質という色眼鏡を通して語るしかないのだ。これが、各小説を分析するモームの基本的視点である。本書は、モームが選んだ１０篇の小説のあらすじについて語られたものではなく、１０人の小説家に関して、伝記などの膨大な資料を簡潔に駆使し、説得的でバランスのとれた人間分析を施した上で、各小説家の分身としてそれぞれの小説を分解してみせる、まことに興味深い人間観察の書である。対象となっているのは、スタンダールの『赤と黒』、バルザックの『ゴリオ爺さん』、フローベールの『ボヴァリー夫人』、メルヴィルの『モウビー・ディック』（邦訳名『白鯨』）、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』など。退屈でつきあいきれないほど長大な世界の名作は、やはり欠陥の多い冗長な作品であった。だが、それにもかかわらず、それらの作品にはすべてそれぞれに、比類なき偉大な長所がある。モームは彼独自の視点から、それらの長所をも明確に示してくれる。この作品に関するかぎり、モームには漱石の明快さに通じるものがあるのかもしれない。

【書名】道楽と職業	**働くということ**	**告発封印**
【著者】夏目漱石	**日本経済新聞社（編）**	**高任和夫**
【発行】ランダムハウス講談社（文庫『漱石傑作講演集』に収録）	**日本経済新聞出版社（日経ビジネス人文庫）**	**光文社（光文社文庫）**

『道楽と職業』は、講演の名手でもあった漱石による兵庫県明石での講演記録である。その講演内容を要約すれば、分業社会では他人のために働くことが結局自分のためになる。しかし、自分本位が重きをなす仕事もある。それは…。生きていくために働くという段階が終わりつつある社会では、働く意味があらためて問いなおされる。大学は出たけれど、職業に就きたいとは思わないという風潮は、今にはじまったものではない。

『働くということ』は、日経新聞連載時から好評であったらしいドキュメント記事。トップ技術者から転身し、子どもに未来を託す園長先生、あるいは何度も退職を決意しながら、満足しつつ定年を迎える企業人など、様々な就職スタイルをとりながら現代を生きる人間模様が、手短に次々と展開される。

さらなる併読本としては、現代の大手商社審査部で問題取引を２０年以上にわたり監視・対処してきた著者による企業サスペンス。『告発封印』は連作小説で、各事件が簡潔に解決される。儲けるためには手段を選ばない問題取引などの、より詳細な構造を知りたければ、同じ著者の『架空取引』、『商社審査部２５時――知られざる戦士たち』、『粉飾決算』（いずれも講談社文庫）などがお薦め。最新連作小説集『罪びと』（光文社）は『告発封印』の続編的内容。

人間のための経済活動から、効率的な経済のために必要な人間の養成へ、という様相を呈しつつある現代。「人間らしい生活」を取り戻すことは、果たして可能か。

【書名】下山事件	**日本の黒い霧 上・下**	**プラトンの『国家』**
【著者】森達也	**松本清張**	**サイモン・ブラックバーン（木田元 訳）**
【発行】新潮社（新潮文庫）	**文藝春秋（文春文庫）**	**ポプラ社（『名著誕生』第４巻）**

日本がまだ何処に向かうか定かではなかった戦後まもなくの 1949 年、怪事件が頻発する。その中で最大級の謎に包まれているのが、国鉄初代総裁轢断死事件。通称下山事件。自殺説、ＧＨＱ謀略説、共産党犯行説など、その真相解明に挑戦した作品は多い（『日本の黒い霧』第１章参照）。アメリカ占領軍内のＧＳとＧ２の勢力争いと、その結果としての占領政策の方向転換。政策転換に利用される、三越本店傍の貿易商を装った諜報機関。その諜報機関を指揮していたのは、「国のため」を大義名分とし、他人の命を平気で踏みにじる、右翼の大物然とした地方の名士。日本政府の「公式」見解は、自殺。しかし同時に、当時勢力を拡大しつつあった共産党の弱体化を図り、民衆内に同党への漠然とした恐怖感を醸成するよう絵を描いたのは誰か。アメリカの政策に盲従し、根拠なきデマを公式発表する首相。大勢に流される書き捨て・読み捨ての新聞記事。関係者が次々と鬼籍に入るにしたがい、闇の圧力は融けはじめるが、そのとき、有力な証言・物証もまた消えていく。映像作家でもある『下山事件』の著者は、時に繊細すぎるほどの接近法で、事実の断片を拾い集め、真相を象ろうとする。が、それは真相を解明するためではなく、主観的な真実を感知するためにそうするのだ。近すぎる事件は焦点が合いにくい、ゆえに遠い過去をよくよく考えてみることが必要なのだ、とつぶやきながら。「力」を持たないものが、同じ事態の繰り返しを可能な

かぎり避けるためには、このような試みを重ねることが必要なのかもしれない。「プラトン国家論」の強者の正義に関する議論などと重ねながら読むと、国家の論理の一般性と日本という国の特殊性などについて、考えや興味も一層深まる…かもしれない。

【書名】赤西蠣太　　樅ノ木は残った 上・中・下
【著者】志賀直哉　　山本周五郎
【発行】岩波書店　　新潮社
（岩波文庫『小僧の神様』に収録）　（新潮文庫）

山本周五郎の小説世界を簡潔に表現すれば、慎ましやかではあるが、凛としていて、澄み渡っている、ということになるでしょうか。いわゆる「伊達騒動」を題材にとったこの２つの小説は、前者が短編で、後者が文庫本３冊からなる長編という形式の違いだけでなく、焦点のあて方も全く異なります。腸捻転を自分で割腹して治すという破天荒な架空の人物を中心に、とりとめのない、だが同時に、当人にとって思いがけない事態へと話が展開していく『赤西蠣太』に対して、村のお寺の屋根裏から発見された新資料を元に、伊達騒動の（ひいては原田甲斐の）真実をあぶり出そうとする山周。変幻自在な小説家の空想力と構想力をとくとご賞味下さい。

山周の他の短編なら、『町奉行日記』、『私です物語』（以上、短編集『町奉行日記』所収）、『百足ちがい』（短編集『深川安楽亭』所収）、『裏の木戸はあいている』（短編集『ひとごろし』所収、いずれも新潮文庫）などが読みやすいかもしれません。『さぶ』（新潮文庫）は力作長編ですが、最新文庫本は映画化にあわせたような、藤原竜也らしき男の劇画風表紙で、購入するには躊躇するかもしれません。

【書名】素数の音楽　　オイラー、リーマン、ラマヌジャン　整数
――時空を超えた数学者の接点
【著者】デュ・ソートイ　黒川信重　　田島一郎
（冨永星 訳）
【発行】新潮社　　岩波書店　　共立出版
（新潮クレスト　（岩波科学ライブラリー）　（数学ワンポ
ブックス）　　イント双書）

皆さんは素数について、どれだけのことを考え続けられますか？ 上記３

冊は、素数について考え続けてきた人間の歴史を一般向けに紹介したものです。現在のところ、最後の難問といわれる「リーマン予想」が、素数に関する思考の歴史の頂点を形成しています。『素数の音楽』では、「リーマン予想」の問題成立過程と、その解決に挑戦する数学者たちの取り組みを、オックスフォードの俊英数学者が活写しています。素数に関する問題は整数論の中に含まれるわけですが、『整数』は教科書の補助教材スタイルで書かれた小冊子で、同じく小冊子でゼータ関数の発展を中心に書かれた『オイラー、リーマン、ラマヌジャン』などと併読すれば、『素数の音楽』の内容を、わからないなりに自分であれこれ考えてみる楽しみに役立つと思います。また『素数の音楽』には、微積分を知らずにフェラーの『確率論とその応用』（紀伊國屋書店に邦訳あり）を読もうとして歯が立たず、本格的に夜学で勉強し直して、現在数学者として活躍している元・手品師の話など、魅力的な人物が多数登場します。

【書名】	**ドレの「神曲」**	**花さき山**	**銀河鉄道の夜** **（画本 宮沢賢治）**
【著者】	**ダンテ・アリギエーリ 著** **ギュスターヴ・ドレ 画** **（谷口江里也 訳）**	**斎藤隆介 作** **滝平二郎 絵**	**宮沢賢治 著** **小林敏也 画**
【発行】	**宝島社**	**岩崎書店**	**パロル舎**

＜「ここではないどこか」について＞

思いを寄せた女性に相手にされず、勢力争いに敗れ故郷を追われた自意識過剰な貧乏貴族が、伝説上の人物、歴史上の人物に紛れ込ませて、政敵などの同時代人を裁く「自己中心的正義」の書、『神曲』。

しかし、その怨念の力は、聖書やギリシャ神話のエピソードを巧みに配した虚構の世界（地獄、煉獄、天国）を構築し、ボッカチオ、ボッティチェリ、ブレイク、ボルヘスなど、錚々たる芸術家たちの創作意欲を刺激し続けている。

なかでも、フランスの天才版画家ギュスターヴ・ドレの１３３枚からなる挿画は圧巻。尾っぽを巻き付け罪の重さを測る審判者ミノス、善人面の怪獣ゲリュオン、堕天使のなれの果て、最下層地獄の主ルシフェル、美貌の蜘蛛女アラクーネなどが居並ぶ地獄篇と煉獄篇は、怪獣カタログとしても必見。

大学院生時代に購入したドレの版画完全収録谷口訳（ＪＩＣＣ社版）は、

意訳・抄訳部分が多く、はじめて読む人には理解しやすい。１００編の詩からなる本文の完全訳を読むには、河出文庫版の平川祐弘訳３分冊が便利かもしれない。収録の詳細な訳注からは、森鷗外、正宗白鳥、夏目漱石、西田幾多郎らによる日本での『神曲』受容状況を窺い知ることができる。また、小型版ながら、ドレの版画も９０枚近く収録されている。ついでに、９編のエッセイからなる『ボルヘスの「神曲」講義』（国書刊行会、含ブレイクのカラー挿画８枚）をあわせて読めば、素人でも『神曲』を満喫できる。

虚構の世界を楽しむのは、人間の本質。特に子供は、その種の能力に恵まれている。虚構の力を借りて人の道を暗示する日本の名作絵本『花さき山』を『神曲』に対抗させるとすれば、人の醜さが描かれていない分だけ、迫力の点で見劣りするか？

ところで、日本のカレーと同様、キリスト教もまた日本に特有な仕方で定着しつつあるとしても不思議ではない。ダンテが生きながら三獄（国）を旅したように、緑色の切符で乗車したジョバンニ１人だけが生還してしまう『銀河鉄道の夜』。全編には、我が身を赤々と燃やす蠍に象徴された賢治流キリスト教が横溢している。パロル舎の「画本 宮沢賢治」シリーズは、賢治に心酔しているイラストレーター小林敏也の手になる本文完全収録の賢治ワールド視覚化版。すでに１５冊ほど出版されているこの画本シリーズのなかでは、他に『土神と狐』、『やまなし』、『オッベルと象』などが印象的。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
川上 陽介（かわかみ ようすけ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】春琴抄
【著者】谷崎潤一郎
【発行】新潮社（新潮文庫）

若い頃には、すべての文章を書き写し、丸暗記してしまいたいほど好きになってしまう作品があるものでしょう。私にとっては、谷崎潤一郎の『春琴抄』や、芥川龍之介の『手巾』『龍』『お時儀』『馬の脚』『大導寺信輔の半生』などが、まさにそのような作品でした。

『春琴抄』の文章は、句読点が極端に少なく、皆さんが自分で文章を書くときには決して真似をしてほしくはない、あまりにも個性的で、しかも古典的な文学性に満ち溢れた作品ですが、個人的には、どうしても真っ先に推薦せずにはいられません。日本語という言語のもつ芸術的表現力を、極限にまで高めた谷崎潤一郎という名文章家の傑作として、『文章読本』『細雪』『猫と庄造と二人のおんな』『鍵』『卍』『少将滋幹の母』『潤一郎訳源氏物語』などとともに、じっくり味わってほしい作品です。

『春琴抄』は、昭和 8 年（1933）、著者 47 歳のときに発表されました。富山県立大学附属図書館には、新潮文庫版のほか、『谷崎潤一郎全集』全 30 巻（中央公論社、1981～85 年）が揃っています。

【書名】漢字と日本人
【著者】高島俊男
【発行】文藝春秋（文春新書）

小学校では「十冊」という漢字の読みを「ジュッサツ」ではなく「ジッサツ」と教えています。たしかに、「五十歩百歩」という言葉を辞書で調べてみると、「ゴジッポヒャッポ」としか出てきません。しかし、それは私たちが普通に使っている日本語の発音とは異なります。それでは、なぜそのように「不自然」なことが起こっているのでしょうか。

日本人が「漢字」という外国語（中国語）の文字を使い始めたときから、日本語は実に「不自然」な歴史をたどることになりました。この本は、そのような言語の歴史を、著者独特の、明快で分かりやすい、実に皮肉っぽい口

調でしっかりと教えてくれます。

高島俊男という方は、実はその世界では有名な人。きわめて専門的な話を、誰にでも分かるように説明する術に長けています。その主張はかなり極端なものですが、一考に値するものばかりです。『お言葉ですが…』『本が好き、悪口言うのはもっと好き』『漱石の夏やすみ』『水滸伝と日本人』など、高島俊男氏の珠玉のエッセイ集をお薦めします。

【書名】水滸伝
【著者】施耐庵　（松枝茂夫 編訳）
【発行】岩波書店（岩波少年文庫）

四大奇書の一つである『水滸伝』の物語は、これまでに何度もテレビドラマ化され、中国では 2011 年に全 86 回に及ぶ超大作が放映されたばかりです。とりわけ、中国中央電視台が制作した 1998 年版『水滸伝』（中国全土の平均視聴率 45.91%）のエンディングテーマ曲は、108 人の豪傑たちの野性的な心意気を見事に表現しており、実に味わい深く、忘れがたいものです。豪快無比で、時には乱暴きわまりない豪傑たちによって繰り広げられる、この庶民的なアクション活劇をまだ堪能したことのない人は、とりあえず岩波少年文庫版のやさしい日本語訳で、楽しくスピーディーに鑑賞することをお勧めします。もちろん、テレビドラマ（1998 年版）も必見です。

【書名】「甘え」の構造
【著者】土居健郎
【発行】弘文堂

日本文化とは何か。日本人らしさとは何か。新渡戸稲造の『武士道』から、土居健郎の『「甘え」の構造』に至るまで、世の中には数多くの日本文化論が出回っています。日本人であるからには、日本文化、日本社会、日本人の精神構造について、一度は自分で考えてほしいと思います。手っ取り早く日本文化論の概要を知りたい人は、大久保喬樹著『日本文化論の系譜』（中公新書）、佐伯彰一・芳賀徹編『外国人による日本論の名著』（中公新書）の二冊を流し読みし、そこから自分の疑問に応えてくれそうな本を一冊選び、しっかり通読してください。私のお薦めは、『「甘え」の構造』のほか、李御寧著『「縮み」志向の日本人』（講談社学術文庫）、そして上記ガイドブックには紹介されていませんが、鈴木孝夫著『ことばと文化』（岩波新書）です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
原口 志津子（はらぐち しづこ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】怖い絵　　怖い絵〈２〉　怖い絵〈３〉
【著者】中野京子
【発行】朝日出版社

昔の絵には、とても、「きれい」と審美的に鑑賞できないものがあります。怖かったり、不思議だったり、どう見ても変だったり。そういう絵をどうみたら良いのかについて教えてくれる本です。ただ、どう見ても怖い絵ばかりなのに、さらに怖く見えるように解説されるので、恐がりの人には向かないかもしれません。

【書名】日本美術応援団
【著者】赤瀬川原平、山下裕二
【発行】筑摩書房（ちくま文庫）

著者の赤瀬川原平は、千円札を拡大模写した作品で、裁判になったことでも有名な前衛美術家です。山下裕二は、明治学院大学の教授で、室町美術の研究者ーでしたが、現在では、赤瀬川原平とともに、ガクランを着て、人気の無い日本美術の応援団をつとめています。この二人が著した日本美術応援本は、要チェックです。この本で日本美術に興味をもったら、原口研究室のドアをノックしてみましょう。山ほどおすすめ本がありますよ。

【書名】見仏記
【著者】いとうせいこう、みうらじゅん
【発行】角川書店（角川文庫）

いとうせいこうは、日本にヒップホップカルチャーをひろめたラッパーでもある才人。みうらじゅんは和製英語「マイブーム」を造ったイラストレーターです。仏像オタクのみうらが、いとうをまきこんで、仏像見物の珍道中をくりひろげます。「ボクの考える仏像たちはミュージシャンである。彼らは極楽浄土からやってきて、お堂でコンサートをひらいている。彼らはみなスーパースター」などの吹き出しのある、わかりやすいイラスト付きです。

【書名】仏像のひみつ　　続・仏像のひみつ
【著者】山本勉 著、イラスト 川口澄子
【発行】朝日出版社
東京国立博物館に勤務するまじめな、まじめな仏像研究者(現在は清泉女子大学教授)が、その学識を惜しみなく注ぎ込んで、とてもわかりやすく解説した、親切な仏像入門書です。本当に力量のある研究者は、わかりにくいもってまわった言い方をしないのです。イラストもとても良いです。

【書名】邦訳名『華麗なるギャツビー』あるいは『グレート・ギャツビー』
【著者】フランシス・スコット・フィッツジェラルド
【発行】角川書店（角川文庫）、中央公論新社（村上春樹 訳）ほか
元祖ロスト・ジェネレーション―ゆれうごく 1920 年代の雰囲気を伝える本です。大邸宅で繰り広げられる、豪華な、しかし切ない苦い恋愛模様です。若い時に是非読んで欲しい一冊です。

【書名】鹿男あをによし
【著者】万城目学
【発行】幻冬社
ＴＶドラマで見てしまった人も多いかもしれません。地震による滅亡を防ぐために、主人公が時に情けなくも活躍します。陰陽道や歴史ものの好きな人は、はまると思います。同作者の『鴨川ホルモー』（産業編集センター）は、式神のような「オニ」を操るゲームのようです。しかも存分に笑えます。

【書名】差別と日本人
【著者】野中広務、辛淑玉
【発行】角川書店（角川 One テーマ 21 新書）
経済的に厳しい時代には、排外主義や非寛容が台頭しやすく、また、現代は身分社会ではなく、平等な社会であるはずなのに、他人を見下し差別することによってしか自我を確立できないむきもいます。被差別部落出身の元・自民党幹事長と在日女性実業家が、日本における差別について語り合います。読みやすい対談形式です。是非一読下さい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
岡本　　啓（おかもと ひろし）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】カラマーゾフの兄弟
【著者】フョードル・ミハイロヴィチ・
ドストエフスキー
【発行】光文社（光文社古典新訳文庫）、新潮社（新潮文庫）ほか

19 世紀ロシア文学の最高峰のひとつ。カラマーゾフ家の父親とその息子たち、彼らを取り巻く人々との間で、凄まじい心理闘争が繰り広げられる。物語の中盤で父親は殺害されるが、その犯人は兄弟のうちの誰か、という推理・法廷小説としても屈指の傑作である。兄弟のひとり（次男イワン）が糾弾する現世の不条理の数々、そして「虐げられた幼き者の涙をこの世界は償うことができるのか」という叫びに、人類はいまも応えることができない。

【書名】あなたのなかのサル――霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源
【著者】フランス・ドゥ・ヴァール（藤井留美 訳）
【発行】早川書房

人間の本性は、そもそも善なのか悪なのか。ヒトは他者への慈愛や共感を示す一方で、酷薄残虐な暴力や殺戮をも嗜好する。本書は、そのような人間性の起源を、チンパンジーとボノボという対照的な霊長類の群れの観察結果から探る。人間の道徳性に関する議論は、長らく形而上の思弁あるいは宗教的な教義の範疇に止まってきたが、現在では進化生物学と行動生態学に立脚した客観的事実に基づいて探究される時代に至ったことを確信できる。

【書名】果てしなき探究――知的自伝　上・下
【著者】カール・ライムント・ポパー（森博 訳）
【発行】岩波書店（岩波現代文庫）

科学と似非（えせ）科学との境界を「反証可能性」に求めたことで著名な哲学者の自伝。20 世紀の自然観に革新をもたらした物理学や心理学などの発展を背景に、「客観的な知識」、「合理的な理論」とはどのようにして認識されるか、その真摯な思索の軌跡を記す。著者とアインシュタイン、シュレーディンガー、ゲーデルらとの交流・論争は、科学の目的を「不断の情容赦ない批判的な真理の探究」であると断じた著者の倫理的実践であった。

【書名】不完全性定理――数学的体系のあゆみ
【著者】野﨑昭弘
【発行】筑摩書房（ちくま学芸文庫）

理性の荘厳な美の体系ともいえる数学。20 世紀の数学者ゲーデルは、その理性に対して人類が抱いていた観念の根幹を揺るがす定理を発見する。本書は、古代ギリシャに発する数学の体系化（公理と証明による形式化）のあゆみを丁寧に辿りながら、厳密と信じられてきた数学的方法に原理的矛盾（不完全性）が存在すること、ひいては人間の知的営為の射程に限界があることを、他ならぬ理性の力でそれを証明したゲーデル 24 歳の偉業へと導く。

【書名】生命の意味論
【著者】多田富雄
【発行】新潮社

理論物理学者シュレーディンガーの名著『生命とは何か』（岩波文庫）以来、「生命」をある物理的な概念で定義しようとする困難な試みが続けられている。本書は、死、性、遺伝子、自己、老化など、生物に観察される普遍的な現象を解釈し、その「意味」を記述する。国際的な免疫学者であった著者は、環境からの偶発的な侵襲にも対処しうる生命現象の特質を、「超システム」という概念を創出することによって統合的に把捉しようとしている。

【書名】谷中村滅亡史
【著者】荒畑寒村
【発行】岩波書店（岩波文庫）

足尾銅山の開発は、鉱毒の流出汚染と山林濫伐による洪水とを渡良瀬川流域にもたらした。元来肥えた農土と豊かな川漁の地であった栃木県谷中村の村民は自身の健康と生業を奪われた上に、1907 年明治政府の土地収用法により村ごと消滅を強いられる。本書は、田中正造の懇請を受け、著者 20 歳にして足尾銅山の裏面史を後世に問うた憤激のドキュメンタリー。2011 年 3.11 福島原発事故に、「公害の原点」谷中村の歴史をあらためて想起する。

【書名】苦海浄土――わが水俣病
【著者】石牟礼道子
【発行】講談社（講談社文庫）

敗戦後、日本の高度経済成長を牽引した重化学工業発展の陰で、最大の産業公害をもたらした水俣病。不知火海への有機水銀の垂れ流しは、生態系と人間を破壊し、家族・地域社会・郷土文化を崩壊させた。この悲哀に充ちた現場を、本書は声高ではなく、寄り添うような文章で告発した「私的」ルポルタージュである。虐げられた人間が宿す「生」の光を、情理を尽くした美しい日本語で書き留めた「現代の民話」に、私は畏敬の念を禁じえない。

【書名】医学と仮説――原因と結果の科学を考える
【著者】津田敏秀
【発行】岩波書店（岩波科学ライブラリー）

筆者は医学的因果関係を研究する疫学者であり、「原因」と「結果」は実在世界に属するが、それらを結びつける「因果関係」は言語世界に属する、という大前提を強調する。すなわち、因果関係は確率統計という数学的言語で記述されるのである。森永ヒ素ミルク事件や水俣病において、食中毒としての因果推測にもとづく通常の初動対応が取られていれば、これほどまでの被害の拡大と訴訟の長期化に至ることはなかった、との指摘は重大である。

【書名】ルイズ――父に貰いし名は
【著者】松下竜一
【発行】講談社（講談社文芸文庫）
本書は、1923 年関東大震災後の混乱に乗じた陸軍憲兵によって殺害された大杉栄と伊藤野枝の遺児伊藤留意子からの聞き書である。両親は、戦前「無政府主義者」と国賊視され、戦後民主主義の到来が一転名誉を回復させた。１歳で死別して記憶には存在しないが、常に自分の人生の重石であった父母の生き方を、留意子は次第に理解していく。昭和という時代を市井に生き抜き、自立した女性へと成長を重ねた半生の記録は、美しく爽快でさえある。

【書名】将棋の子
【著者】大崎善生
【発行】講談社（講談社文庫）
夢の実現のために青春のすべてをかけて打ち込んでいることが、ある１日を境に全く無に帰するかもしれないという条件の下で、あなたはそれを続けていくことができるだろうか。本書は、プロ棋士養成機関である将棋奨励会に集う若者たちの「その後」を描くノンフィクション。26 歳の誕生日までに四段へ昇段しなければ退会という制度の前に、多くの「天才少年」が夢を絶たれて実社会へと歩み出す。プロの厳しさと青春の哀歓に胸を衝かれる。

【書名】今日の芸術――時代を創造するものは誰か
【著者】岡本太郎
【発行】光文社（知恵の森文庫）
20 世紀現代美術の大家であった著者の芸術論集。本当に美しいものとは、「うまくあってはいけない。きれいであってはならない。ここちよくあってはならない」のだという。この逆説的な宣言が、著者のどのような意図・信念から発せられたのかは本書の記述に譲る。私はこの言葉を、個人の生きる姿勢・処世観の表現として受け取った。今でも何かと葛藤する折々に、ふとこの言葉が私を鼓舞する呪文のように頭の片隅をよぎることがある。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
井戸 啓介（いど けいすけ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】城の崎にて
【著者】志賀直哉
【発行】新潮社（新潮文庫）ほか

瀕死のけがから回復した「自分」が、あと養生のために温泉地で三週間を過ごす。その間、散歩途中などに虫や小動物の死ぬ姿を見て、人間の生と死について考えを巡らす、という内容の私小説です。随筆というジャンルに入れてもよいかもしれません。「生きていることと死んでしまっていることとに差はないような気がする」、「死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでの動騒は恐ろしい」と言う作者の感覚に、まだ若く大手術などを経験したことのない皆さんはどのような感想を抱くでしょうか。

志賀直哉は「小説の神様」と評され、その簡潔な叙述と巧みな筋立てはしばしば「文章のお手本」とされてきました。その評価に見事にマッチした作品だと思います。1917 年の作品です。

【書名】砂の女
【著者】安部公房
【発行】新潮社（新潮文庫）

ノーベル文学賞の有力候補であった著者の代表作にして、世界約 30 カ国で翻訳されている中編小説です。「昆虫採集に出かけた男が、砂に埋もれていく家に軟禁される羽目になる。男はいろいろな手段で脱出を試みるのだが…」というストーリーで、とても意外な、しかしそれもありうるかも、ともいう結末が待っています。「囚われる」とか「逃げる」とはどういうことなのかをあらためて考えさせてくれます。

息詰まるほどの緊張感にあふれた密度の濃い作品で、1962 年という約 50 年前の発表ながら、今日発表されたとしても斬新さは失われないでしょう。アヴァンギャルドな安部公房ワールドへの入門としても好適ですが、その世界の源泉には、作品の素材にするために、自分の夢を翌朝に記録に残していたという著者の日課があるとの説とのもあります。

映画化もされており、こちらもアカデミー賞にノミネートされるほどの高評価を受けています。

【書名】紫苑物語
【著者】石川淳
【発行】講談社（講談社文芸文庫）

王朝時代末期を舞台に、２人の男の、対照的な生き様を描いた短編小説です。国の守宗頼は、歌人の血筋に生まれ将来を嘱望されながらその価値観に合点がゆかず、生死で決着をつけることのできる弓の世界に引き寄せられ、生きるスタイルを見いだします。以来、ひたすら「力と力の勝負」を挑んで、意に沿わぬものを次々に容赦なく討ち捨てていきます。さて一方、その領内に住む農民平太は、ただひたすらに、他者と争うことなど考えもせず仏を彫って日々を送っています。このふたつの自我が激突したときに、何が起きるか？

屈指のレトリックの使い手である著者一流の引き締まった文章は、暗唱したくなるほどの魅力があります。1956 年の作品です。

【書名】草の花
【著者】福永武彦
【発行】新潮社（新潮文庫）

主人公が友人に対して抱いた思いと恋人に向けた愛情、それらはあまりにも純粋すぎて、受け入れられることはなかった。主人公は絶望のあまり、自殺に近い手段で死を選びます。

性別を超えて「愛」とはなにかを問いかける作品ですが、その背後にある「人間存在の孤独」を重視している点で、単なる「恋愛小説」を越えたものとなっていると感じます。

福永武彦の諸作品は「人は他人の気持ちをどこまで理解できるのか？」という問題意識に貫かれていますが、この点もわかりやすく展開されています。

とても重く深刻なテーマが描かれていますが、リリカルな美しさにもあふれた作品です。1954 年の作品です。

【書名】スティル・ライフ
【著者】池澤夏樹
【発行】中央公論新社（中公文庫）

1988 年芥川賞受賞作品。マイペースにアルバイト生活を送る主人公の「ぼく」は、どこか謎めいた同僚の佐々井と親しくなります。そしてある日、佐々井から奇妙な依頼を受けて…。

理知と情緒のバランスがとれた、読後感がさわやかな小説です。みずみずしく透明感にあふれた文体も魅力です。佐々井と「ぼく」の企てがどうなるのか、はらはらしながら楽しむ読み方もできますし、自然の美しさの巧みな描写を散文詩として味わう読み方もいいでしょう。

【書名】月と六ペンス
【著者】ウィリアム・サマセット・モーム
【発行】新潮社（新潮文庫）、岩波書店（岩波文庫）ほか

「自分が本当にやりたいこと」とは、よく耳にする言葉ですが、そういうものは存在するのでしょうか？ 存在するとしたならば、それを追い求めるには犠牲や代償が避けられないのでしょうか？

本作品の主人公ストリックランドは、「芸術（絵画）」というものにとりつかれてしまい、いわゆるサラリーマンの職を捨て、家族も捨て、異国へ渡ります。その生き様は「すばらしい」と賞賛されるものなのか、「ばかげている」と皮肉られるものなのか、あるいは「おそろしい」ことなのか。この作品を読むと、そういうことを考えさせられます。

ちなみに、この作品は画家ゴーギャンの人生をモチーフにしています。題名の「月」は追求する夢を、「六ペンス」は現実の生活を意味していると言われています。1919 年に発表された作品で、モームを人気作家として世に出しました。

【書名】寺田寅彦随筆集 全５巻
【著者】寺田寅彦（小宮豊隆 編）
【発行】岩波書店（岩波文庫）

寺田寅彦は、明治・大正時代の日本を代表する物理学者であり、同時に夏目漱石の教え子・弟子でもありました。いわゆる「文系と理系」（私はこの二分法が好きではありませんが）両方に秀でた存在だったわけです。

そのような背景があってか、科学的な問題に加えて、日常のふとしたことや趣味的な題材を、冷静な思考と味わいのある文章で綴った随筆が多数残されています。

紹介した岩波文庫は、全５巻ありますが、通して読もうなどと考える必要はないでしょう。適当にページを開き、興味が持てそうな部分に出会えばゆったりとした気分で一緒に考えを巡らせてみる、そのような形で楽しめばよいと思います。(よく知られている「科学者とあたま」は第４巻にあります。)

【書名】レトリック感覚
【著者】佐藤信夫
【発行】講談社（講談社学術文庫）

文章を読んでいて、ちょっと変わったことばづかいによって興味をそそられる時、そこにレトリックがあるといいます。レトリックは「わざとらしい小手先の技巧」としてマイナスの評価をされる場合が多々あります。その典型的なケースが「物事をそのまま、かざらずに書きなさい」という作文指導です。レトリックとは「事実によけいな虚飾を加える悪者」なのでしょうか。

本書はレトリックを体系的に分類して解説するとともに、そこに創造行為という積極的な評価を与えています。しかし、そういった言語学的なことは脇に置いても大丈夫。本書は「気の利いた名文句集」として、頭を使わなくても引用例を読むだけで楽しめます。1978 年の作品。

【書名】自分の感受性くらい
【著者】茨木のり子
【発行】花神社

詩集です。手裏剣のように心に突き刺さってくる切れ味の鋭い言葉、しかし親愛なる人へは愛情にあふれています。

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」

【書名】疑似科学入門
【著者】池内了
【発行】岩波書店（岩波新書）

「科学的根拠のない言説」だけに限定されず、「現代の科学ではグレーゾ

ーンに位置する学問」に対してどのような姿勢で臨むのが望ましいか？「科学とは何か」を考える上で、手頃な入門書と言えましょう。

【書名】超常現象の心理学――人はなぜオカルトにひかれるのか
【著者】菊池聡
【発行】平凡社（平凡社新書）

世の中にはうさんくさい「超能力」、「超常現象」があふれています。そういったものにだまされないためにどうすべきか、科学を学ぶものとしてどういう姿勢でのぞむのがよいかを考えさせられる著作です。テレビのワイドショー番組で、著者が「霊能者」を自称する人物と対決したくだりだけでも一読の価値あり。

【書名】トンデモ超常現象９９の真相
【著者】と学会（編著）
【発行】洋泉社

「空飛ぶ円盤に誘拐され身体検査されたというアメリカ人が実在する」、「気功パワーは科学的に証明された」、「臨死体験によって死後の世界を見た」、「ノストラダムスは現代の多くの事件を予言している」、「ポルターガイストは実在する」などなど、多くの人がなんとなく信じてしまっている不思議な言説。しかしその実像は何だったのでしょうか？

我々がメディアによって、いかにあやふやな情報をもとにだまされているかを実感させてくれる例が満載されています。

【書名】日本語の作文技術
【著者】本多勝一
【発行】朝日新聞出版（朝日文庫）

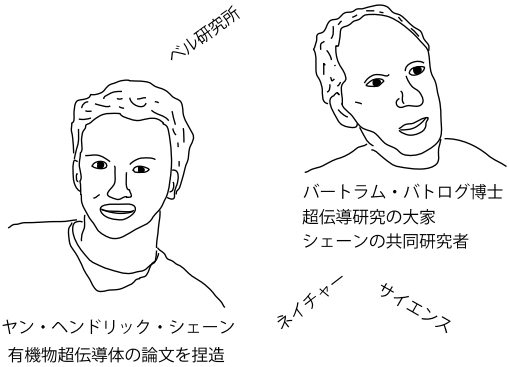
理科系の作文技術
木下是雄
中央公論新社（中公新書）

ともに「正確な日本語でレポートを書く」ための必読書です。レポートや報告文はどうあるべきかといったことや、句読点の打ち方から修飾語句の並べ方、そしてレポート全体の構成まで、わかりやすく例を挙げて説明されています。大学生になったなら、早いうちに読んでおきたい書物といえるでしょう。著者はそれぞれ新聞記者と物理学者です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
石森 勇次（いしもり ゆうじ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】論文捏造
【著者】村松秀
【発行】中央公論新社（中公新書ラクレ）

耐震構造や食品表示の偽造、振り込め詐欺、原発の安全性など、私たちのまわりにも様々なウソ・不正行為がありますが、科学者の世界でも専門家もだまされるような論文の捏造というウソ・不正行為があります。科学は正直なものですが、科学者は正直とは限らないというわけです。また、権威にだまされるのは素人とは限りません。本書は2004年にＮＨＫのＢＳドキュメンタリーで放送された「史上空前の論文捏造」の書き下ろしです。なぜ捏造を犯したのか、不正はなぜ見抜かれなかったのか。競争の激しい現代において、学生であれ社会人であれ、さまざまな場で誰もが直面するかもしれない問題として、一読を。



【書名】フェルマーの最終定理
【著者】サイモン･シン（青木薫 訳）
【発行】新潮社（新潮文庫）

整数に関する問題は、問題を理解するのはやさしいが解くのはとてつもなく難しいことが多い。この本の表題ともなっている「フェルマーの最終定理」の証明もそのような整数問題の１つであり、アマチュア・プロを問わず 300 年もの間、多くの数学者の挑戦を退けてきた問題である。1995 年最終的に証明を成し遂げた勝者はアンドリュー・ワイルズという数学者であった。しかし、その証明への取り組みは試練に満ちており、７年間の隠密行動、そして１度は証明できたと発表して、その後証明に穴があることがわかり１年余りの間、公にさられた状態での穴埋め作業の末ようやく証明完了というドラマが書かれています。谷山、志村、岩澤といった日本人数学者もからみ、困難な問題にチャレンジする人間模様を描いた物語として、一読を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
戸田 晃一（とだ こういち）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】ＪＲ全線全駅下車の旅
——究極の鉄道人生 日本縦断駅めぐり
【著者】横見浩彦
【発行】ベストセラーズ

ＪＲ全駅下車を制覇なんて、（私を含む）多くの人には意味のないようなことかもしれない。ただそれを真剣にひたむきにやりとげる信念とエネルギーはとにかくすごい。

【書名】おくのほそ道——現代語訳／曽良随行日記付き
【著者】松尾芭蕉（潁原退蔵、尾形仂 訳注）
【発行】角川書店（角川ソフィア文庫）

本当は「月日は百代の過客にして…」から始まる松尾芭蕉の書いた文章を味わってほしいが、その準備としてとりあえず現代語訳から。旅というものは本当はこれくらい無計画に「時」と「その場の雰囲気」に流されながら行うほうが楽しいのかも。

【書名】目に見えないもの
【著者】湯川秀樹
【発行】講談社（講談社学術文庫）

中間子論を数理的考察と強い思い込み（執念）でつくりあげた湯川秀樹が、科学者としての自身の思想やその哲学などを解説しようと試みている。難しい表現は多いが、一読の価値あり。

【書名】旅人――ある物理学者の回想
【著者】湯川秀樹
【発行】角川書店（角川文庫）
「一日生きることは一歩進むことでありたい」という有名な言葉を残した湯川秀樹の随筆である。書いてあることの全てを理解することは難しいかもしれないが、どこか頭にのこるフレーズが多い。

【書名】ご冗談でしょう、ファインマンさん〈上〉
【著者】リチャード・フィリップス・ファインマン（大貫昌子 訳）
【発行】岩波書店（岩波現代文庫）
ファインマンは、ジュリアン・セイモア・シュウィンガーや朝永振一郎とともにノーベル物理学賞を授賞した、著名な物理学者である。彼は天才肌の物理学者であったが、その一方でいわゆる「変人」でもあった。決して巷に数多くある自伝のたぐいではなく、自らの人生をユーモアたっぷりに語っている読み物である。本書の続編として『同名〈下〉』や『困ります、ファインマンさん』などがある。

【書名】知っておきたい日本の名字と家紋
【著者】武光誠
【発行】角川学芸出版（角川文庫）
日本人には非常に多くの「名字」がある。その成り立ちや分類などが事細かに書いてあり、非常に興味深い。自分の名字のことが出てきたときには少し感動するかも。同じ著者で類著『名字と日本人――先祖からのメッセージ』（文藝春秋）もあり、こちらもお勧め。

【書名】旧暦で読み解く日本の習わし
【著者】大谷光男（監修）
【発行】青春出版社（プレイブックス・インテリジェンス）
旧暦は決して昔のものではなく、現在でも我々の日常でよく出てくる。その旧暦とは何か、何故日本人の生活と密接に関係してくるのかなどが解説してあり、おもしろい。

【書名】吉良上野介を弁護する
【著者】岳真也
【発行】文藝春秋（文春新書）

「忠臣蔵」はテレビや芝居でよく扱われるが、本当の話を知っているのか？テレビなどからの情報だけで分かった気になっているのではないか？ 常に常識となっている事柄に疑いの眼を向けることは科学技術の基本である。本書は悪役として取り扱われることが多い吉良上野介こそが被害者であるという視点に立っている。その真偽は歴史のみが知ること。本書から、違う視点にたつということを学んで欲しい。

【書名】非線形科学
【著者】蔵本由紀
【発行】集英社（集英社新書）

自然界に起こる現象の多くは非線形現象である。いや、非線形であるからこそ、多彩な自然現象が出現するともいえる。この分野の第一人者が、森羅万象の起源としての非線形科学を、数式を使わずに、分かりやすく解説した入門書である。

【書名】宇宙＝１、２、３ … 無限大
【著者】ジョージ・ガモフ（崎川範行 訳）
【発行】白揚社

著者のガモフ氏はビッグバン理論を支持する最重要な証拠の一つである宇宙（マイクロ波）背景放射の提唱者の一人である。一流の理論物理学者であり、そして一般向けに難解な物理理論を分かりやすく解説する啓蒙書を多く著している。そのどれもが今も色あせず素晴らしい。その代表作は『不思議の国のトムキンス』であるが、現在は手に入りにくいので、今回は本書を推薦する。(『不思議宇宙のトムキンス』という書籍があるが、これはガモフ氏の死後に他の人により加筆修正されたものであるので、今回は除外する。)

本書はミクロ宇宙からマクロ宇宙まで、科学の楽しさをたっぷり味わえる不朽の名著。数式を用いずにこれらの物理を説明することは非常に難しい。それ故に著者の表現力はすごい。

【書名】ボクの音楽武者修行
【著者】小澤征爾
【発行】新潮社（新潮文庫）

高校１年生の時に放送部の部員たちが放課後の校庭で朗読の練習をしていた。大声で連呼されていたけったいな書名に何故か惹かれ、翌日図書館に行き見つけだしたのがこの書籍である。最近になって著者が今や世界的な指揮者である小澤氏であることに気づいた。内容は、音楽を極めるために貨物船に乗って欧州に上陸するまでと、その後の欧州と米国の道中記である。小澤氏が欧州に渡ってから２年余り後に書かれた書籍である。二十代後半の青年音楽家の若い文章であるが、若いから出来る「行動」が鮮やかに描かれている。

【書名】オックスフォード大学・ケンブリッジ大学の入試問題
――あなたは自分を利口だと思いますか？
【著者】ジョン・ファーンドン（小田島恒志、小田島則子 訳）
【発行】河出書房新社

Do You Think You're Clever?: The Oxford and Cambridge Questions（*ISBN: 978-1848311329*）の邦訳である。英国のオックスフォード大学とケンブリッジ大学で実際に出された面接試験（口頭試験）の問題とその解説が紹介されている。ただ，口頭試問といっても一問一答式ではなく，賛否両論があるテーマ・哲学的な問題・パズル的な問題と多様である。例えば，

- あなたは自分を利口だと思いますか？
- あなたならリンゴをどう説明しますか？
- あなたならどうやってタイムトラベルをしますか？

というものである。題意を論理的に考え，自分の考えをまとめ，その考えを理路整然と説明しなければならない。春休みや夏休みにこれらの問題に対して，自分なりの考えをまとめてみることを勧める。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
土井 一幸（どい かずゆき）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】数学ガール
【著者】結城浩
【発行】ソフトバンク クリエイティブ

私が大学院生だったときに、先輩から面白いと伺い読み始めた本です。ミルカさん、テトラちゃん、「僕」の三人が、それぞれの感性で数学を味わいます。2012 年現在、「数学ガール」シリーズは第 5 巻まで（第 2 巻：フェルマーの最終定理，第 3 巻：ゲーデルの不完全性定理，第 4 巻：乱択アルゴリズム，第 5 巻：ガロア理論）出版されており、巻が進むと数学ガールたちも増えていきます。

【書名】人間の建設
【著者】小林秀雄、岡潔
【発行】新潮社（新潮文庫）

小林秀雄と岡潔の対談録です。私が学部生だったときに、大学院生であった先輩から教えていただきました。当時は小林秀雄全作品の一冊としてのみ出版されていましたが、現在では文庫本としても手に取ることができるようになりました。

【書名】不道徳教育講座
【著者】三島由紀夫
【発行】角川書店（角川文庫）

1958 年から 1959 年まで週刊明星にて連載された著者の随筆集（の一部）です。私の紹介する本の中でみなさんが最も名前を目にしたことのある著者だと思います。氏について、どのようなイメージを持っているかは人それぞれだと思いますが、私にとっては学部生時代に出会いたかった一冊です。

【書名】20 世紀をつくった日用品――ゼム・クリップからプレハブまで
【著者】柏木博
【発行】晶文社

我々は進化の過程で道具と共に生活を営むようになりました。道具は我々の生活を便利にするために用いられますが、一方では我々の考え方や物事の見方、時には文化をも一変させるものとなります。本書では、20 世紀に産み出されたいくつかの日用品に焦点を当て、それぞれの出現に至る時代背景やその後もたらされた変化の様子が説明されています。また、20 世紀の日用品に注目することで、その時代がどのような時代だったかを知ることもできると思います。モノづくりの影響の大きさを感じさせてくれる一冊です。

【書名】第三の大国・日本
【著者】ロベール・ギラン（井上勇 訳）
【発行】朝日新聞社

1969 年に発行された、フランス人記者による当時の日本についてのレポートです。思わず目が覚めてしまうくらいの鋭い分析と深い洞察がなされています。見ている人は見ている、そしてどんなに繕ってもごまかせない、ということでしょう。

【書名】育児の百科　上・中・下
【著者】松田道雄
【発行】岩波書店（岩波文庫）

本書はタイトル通り、育児のための百科事典なので、読書という趣とは異なるかと思います。しかし、読書のように前から読むこともできます。自分がどういう風に大きくなって今があるのか、記憶に全くない過去を振り返るのに使うこともできます。

【書名】虚数の情緒――中学生からの全方位独学法
【著者】吉田武
【発行】東海大学出版会

まずこの本を見て、その厚さに驚くことでしょう。本書は虚数が関連する対象について、本書のみでの自習を行うことを目的に書かれています。自力で学んでみたいと思う方は一読してみてはいかがでしょうか。

【書名】まちがったっていいじゃないか
【著者】森毅
【発行】筑摩書房（ちくま文庫）

(表向きには)中学生向けに書かれた問題提起の書です。タイトルにもあるように、著者は「～でもよいし、そうでなくてもよい」という主張を様々な切り口から優しく語りかけます。

【書名】知的生産の技術
【著者】梅棹忠夫
【発行】岩波書店（岩波新書）

年齢が上がるにつれて、処理しなければならないことは多くなると思います。しかし人間に与えられた時間は有限であり、能力にも上限があります。その中でどういう考え方で仕事をするか、という理念のようなものを本書は教えてくれます。

【書名】数学的センス
【著者】野崎昭弘
【発行】筑摩書房（ちくま学芸文庫）

みなさんのなかには、数学を一つの苦行のように感じている方も多いかと思います。そんな方にこそ(そうでない方にも)お薦めしたい一冊です。本書の中で、著者は多くの観点から数学本来の姿を平易な文章で語っています。そこでは、数学を学ぶのに有効なセンスがいくつも紹介されています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
福原　　忠（ふくはら ただし）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】坑夫
【著者】夏目漱石
【発行】新潮社（新潮文庫）

筒井康隆が好きなので、何か１冊推薦しようと思ったのですが、いろいろ思い悩んでどうしても決められなかったので、結局、筒井が絶賛している夏目漱石の中編を推薦することにしました。さる理由で世を儚んだ若者が、偶然茶店で出会った「ぽん引き」のおじさんに「私が紹介すれば坑夫になれる」と言われ、何で坑夫がそんなに有難いのかよくわからないけど世を捨てるにはちょうどいい、と考えて鉱山に働きにいく、というだけのお話ですが、漱石自身が作品中で「これは小説になっていない」と論評しており、筒井が好きなのはそのあたりだと思います。短いのですぐ読めます。ぜひ読んで下さい。

【書名】麻雀放浪記〈１〉青春編　〈４〉番外編
【著者】阿佐田哲也
【発行】角川書店（角川文庫）、文藝春秋（文春文庫）

こういう本をこの企画でリストアップしてよいのだろうか…。でも私は好きです。麻雀好きな人は読んで下さい。私は全編で〈４〉が一番好きですが、
〈１〉は第２次大戦直後の焼け跡の中のお話
〈４〉は戦争の爪あとも消え世の中も落ち着いてきたころ
という設定なので、時代を追う、という意味でも先に〈１〉を読んだ方が断然〈４〉も面白くなります。そしてこれを読んで「ドサ健」ファンになった人は、『ドサ健ばくち地獄 上・下』（角川文庫）をぜひ読みましょう。

【書名】うらおもて人生録
【著者】色川武大
【発行】角川書店（角川文庫）

色川武大（阿佐田哲也の本名）は、ばくちは人生の縮図と考えていることがその作品中の随所で窺われます。前述『ドサ健ばくち地獄』のクライマックス、ドサ健・チン・利之助の 3 人のプロ賭博師の最終決戦において、利之助がどんなに負けても自分の麻雀の打法を変えずに負け続ける、というシーンがあります。このくだりは「フォームが大切」という色川の信念があざやかに描写されていて印象的です。

本書は、色川武大がその波乱に満ちた前半生から抽出した、人生をしのいでゆくためのセオリー（「フォームが大切」もその一つ）を、これから世の中にでてゆこうとする若い人に向けて語った本です。

【書名】作家の値うち
【著者】福田和也
【発行】飛鳥新社

保守の論客である著者が、2000 年当時の 100 人の現役作家とその作品（総数 574 作品）について、それぞれ短い論評を加えた本です。何せ作品ごとに 56 点、35 点などと 100 点満点でいちいち評点がつけてあり、なおかつ評価が低い作家は辛辣な文章で「けちょんけちょん」にやっつけられています。これを不愉快と思うか、痛快と思うかは、読者によってわかれるところですが、まあ、私は面白かったです。

著者の個人的見解ではありますが、上は「世界文学の水準で読み得る作品（90 点代 17 作品）」から、下は「人前で読むと恥ずかしい作品。もしも読んでいたら秘密にしておいた方がいい。（29 点以下 35 作品）」まで評点によってランク分けされているので、それぞれのランクから目に付いた作品をひろって読んでも楽しめますし、自分の好きな作家や過去読んだ作品を探してその評価を見ても楽しめます。

ちなみに、私が好きな筒井康隆は、『虚人たち』の 84 点を筆頭に、おおむね 60 点前後でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
上谷 保裕（うえたに やすひろ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】三国志 全１３巻
【著者】北方謙三
【発行】角川春樹事務所（ハルキ文庫）

日本では吉川英治著（現在は講談社文庫ほかに収録）により多数に愛読されるようになったが、とにかく、三国時代前後の 100 年余りの間の多彩な登場人物による壮大な歴史物語であり、それぞれの男たちの生きざまが面白い。技量の違いによる指導者とそれに従うものの末路、官僚の堕落、色と欲など、現代においても結局変わっていないことが痛感される。ただ、「志」と「信義」については日本人が再考すべきであり、少し長大であるが、未読の方には一読をお勧めする。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
室　裕司（むろ ゆうじ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】自然現象と物理法則のあいだ――物理の本質は公式だけではわからない
【著者】鹿児島誠一
【発行】丸善

物理の教員として、まずは物理に関する読み物を取り上げたいと思います。本書は、著者が大学１年生に対する講義をまとめたものなので、高校で習った摩擦やバネの法則といった物理法則と実際の現象との違いやその原因を、できるだけ簡単な数式と絵や写真等を用いて解説しています。従って、教科書に出てくる公式と現実とのギャップに引っかかったり悩んだりしたことがあれば、本書を手に取ってみるとよいでしょう。ただし、“できるだけ簡単な”と書きましたが、所々難しいと感じる数式が出てきます。難しいと感じても、出てくる数式はすべて大学卒業時には絶対に理解していなければならないレベルなので、無理だと放り投げずに熟読して頂きたい。

【書名】物理数学の直観的方法――理工系で学ぶ数学「難所突破」の特効薬
【著者】長沼伸一郎
【発行】講談社（講談社ブルーバックス）

「大学の物理学は数学であり、大学の数学は哲学だと思え」と言われた人もいると思いますが、実際に大学での物理学ではいろいろな数学の知識を必要とします。物理に出てくる数学を「物理数学」として、多くの教科書が出ていることからもわかるでしょう。この物理数学で、物理学につまずく人も多いと思います。そこで、まずは物理数学を理解した“気になる”ための書物として、本書を一読するとよいでしょう。本書では物理数学に出ている数学や数式を、頭の中で“図”や“イメージ”として描けるように努めて書かれています。あえて“気になる”と書いたように、本書を読んで物理数学をマスターすることはできません。必ず物理数学の教科書をメインとし、その傍らで本書の当該部分を読むようにしましょう。

【書名】伝える力　　伝える力２
【著者】池上彰
【発行】PHP 研究所（PHP ビジネス新書）

皆さんは講義や実験でたくさんのレポートを書き、また卒業論文や研究発表をしなければなりません。それらには必ず読者や聴衆が存在し、皆さんはどのような読者にも理解できるように内容を仕上げなければなりません。論理的な文章を身につける上で、木下是雄先生の『理科系の作文技術』（中公新書）が必ず挙がりますし、私も熟読を勧めます。しかし『理科系の作文技術』を読んで難しいと感じる人もいると思います。そんなときに上に挙げた２冊を参考にしてはいかがでしょうか。著者はいわゆる文系の人なので、理科系では不要な演出法なども目に付きますが、『理科系の作文技術』に出てくることをよりイメージしやすくなると思います。

【書名】歴史が面白くなる東大のディープな日本史
【著者】相沢理
【発行】中経出版

ちょっと毛色の変わった本も取り上げてみたいと思います。本書は東大の日本史に関する入試問題を取り上げています。東大の日本史の問題は、教科書に出てくる事件や出来事の背景・経緯を 100 から 200 字の文章で答えるという独特な出題法をとっています。本書では時代に分けていくつかの過去問を取り上げ、解説と例解を通して、歴史的事件がいかに必然的に起こったかを示しています。現代の日本の成り立ちを理解するのにも役立つと思います。面白いという以外で本書を挙げたもう一つの理由として、事象を短い文章にまとめるという、作文技術の一例としても（特に例解は）参考になると思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
川端 繁樹（かわばた しげき）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】考えるヒト
【著者】養老孟司
【発行】筑摩書房（ちくまプリマーブックス）

自然科学では十分説明できないものを、論理的に捉えて考えるとはどういうことか、を考えさせてくれる書。同著者の『カミとヒトの解剖学』（ちくま学芸文庫）、『日本人の身体観の歴史』（法蔵館）と重なっていて、どの本のどこに何が書いてあったか記憶はあいまいですが、それらの中で最も字も大きく、分量も少なくて、手軽に読めます。

【書名】早すぎた発見、忘られし論文
——常識を覆す大発見に秘められた真実
【著者】大江秀房
【発行】講談社（講談社ブルーバックス）

今では自然科学の教科書に普通に載っていて、こんな発見をよくもしてくれたものだと思う科学者も、現役時代には苦労したことがわかります。現役時代に認められなくても、大したことではないのかもしれません。でも、自分が認識できないときに認められてもうれしいことはない、と思ってしまうのは凡人だからでしょうか。

なおこの本は著作権の問題があり、出版社で回収・絶版の措置が取られています。著作物の引用には気をつけるとともに、被引用物にあたってみるのも面白いかもしれません。

【書名】パラドックス！
【著者】林晋（編著）
【発行】日本評論社

哲学者も自然科学者も、ある意味で少し頭がまともとは言えません。こんなことを問題にして、頭を悩ませているとは。でもその中から、何かを見つけ出し、ただでは起き上がらない能力はさすがかもしれません。書き方はそ

れほど難しくありませんが、扱っている内容がときにかなり高度なので、私自身も十分に理解できていません。理解できれば、深みにはまるかも。

【書名】完訳 三国志 全８巻
【著者】小川環樹、金田純一郎 訳
【発行】岩波書店（岩波文庫）

ＰＣのゲームでやっている以上、一度は元の話を読んでおこうと思って読み始めたら、やめられなくなりました。人を登用し、うまく活かすことの重要さ、人を失わずに勝つ戦略、人の意見を聞く重要さ、義を重んじる武将たち、官僚がときどきそれらをぶち壊してくれます。

もともと脚色した話のため、国が滅ぶときには必ず、無能・暴虐の王が登場します。物語は、最後に晋が三国を統一して終わるのですが、この晋の帝が、真の歴史上でまたまた凄い暴君ぶりを発揮してくれるので、中国の歴史は深遠です。

脚色された絵ではなく文章で読むと迫力が増します。ただ元の話を読むと、人物像がよくわかるため、ゲームの登場人物に傾倒できなくなる危険性あり。

【書名】その数学が戦略を決める
【著者】イアン・エアーズ（山形浩生 訳）
【発行】文藝春秋（文春文庫）

2007 年出版の同名の書籍を、増補し文庫版化したものです。元の題名が”Super Crunchers”で、辞書によると crunch とは「ザクザク砕きながら進む」、「大量の数値計算を行う」という意味で、cruncher には「とどめの一撃」という意味もあります。本書は統計学による数値計算を使って政策や商品の販売戦略が決められ、果ては人間の行動も予測できるという話が出てきます。しかもその数値を取るための実験に、私たちが知らない間に参加しているということも。そして専門家の経験による判断が、数値計算より大抵劣っているということも思い知らされます。これは、数値データの持ち合わせ無しに意見を主張するなという識者に対する警告かも知れません。また特にインターネットの世界では、こんなふうに消費が誘導されていると改めて気付かせてもくれます。ただ５％のはずれが、１年では 18 日にも相当するので、ここにこそ真の楽しみ・発見があるという気もしないではありません。

【書名】πの歴史
【著者】ペートル・ベックマン（田尾陽一、清水韶光 訳）
【発行】筑摩書房

書名の通りです。私が学生時代に読んだ本（1973 年刊行）は、表と裏のハードカバーの裏にπが小数点以下１万桁まで書いてありました。これでも見開き２ページを埋め尽くしています。政治思想の話が時折気になりますが、人間とπとの葛藤の歴史に惹き込まれてしまいます。コンピューターで 10 兆桁計算できる現在でも、基本は三角関数や数列・級数を駆使した人間の頭脳の闘いです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
川崎 正志（かわさき まさし）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】ウッふん
【著者】藤田紘一郎
【発行】講談社（講談社文庫）

皆さんは、あの「もの」が流れる川の水で歯を磨けますか？ 超清潔志向社会に警鐘を鳴らし続ける著者が、この世で最も汚いものの１つと思われるあの「もの」についてその思いの丈を綴った本です。学校でその「もの」を排出することができない小学生、木が人間にその「もの」を催させることなどなど。一部著者の独断と思われることも含まれていますが、目からう〇こ、じゃなくてうろこが落ちること間違いありません。同著者の『清潔はビョーキだ』（朝日文庫）もお勧めします。

【書名】くさいはうまい
【著者】小泉武夫
【発行】文藝春秋（文春文庫）

著者が食した臭い食べ物記です。カプロン酸臭がしそうな山羊料理。カラスがなぜ増えすぎるのか、その理由の１つがわかるカラスの肉の味。内臓を刳り貫いたアザラシの体内で発酵させた海鳥とその食べ方。殺菌をせずに缶詰内で発酵させた魚とその缶詰の開け方など恐ろしい話が満載です。ただ、この本で１つ残念なのは、本に鼻を近づけても何の匂いもしないことです。

【書名】決断力
【著者】羽生善治
【発行】角川書店（角川 ONE テーマ 21）

「直感の７割は正しい。」著者（将棋棋士）によると直感とはそれまでの経験で培ったことが脳の無意識の領域に詰まっており、それが浮かび上がってくるもので、まったくの偶然にパッと思い浮かぶものではないらしい。過日テレビで著者は「経験で直観力を鍛える。」とも語っていました。しかし、人生において「これだ」と思ったことの７割も正しかったとは思えません。

研究においては直感がことごとくはずれています。そうですね、正しかった直感が２つあります。うちの奥さんとうちの猫との出会いです。（いっしょにするなと後日怒られました。）

【書名】屋根裏の散歩者
【著者】江戸川乱歩
【発行】春陽堂書店（江戸川乱歩文庫）、角川書店（角川ホラー文庫）ほか
　中学生の頃、江戸川乱歩の「少年探偵団シリーズ」が好きでした。「明智小五郎」、「怪人二十面相」、「少年探偵団」、「小林少年」これらに胸がときめきました。しかし、「少年探偵団シリーズ」は乱歩が子供向けに書いた本です。本当の乱歩の作品は妖美でストーカーチック、グロテスクそしてサディスティックな世界へとあなたをいざないます。同著者の『人間椅子』、『地獄の道化師』もお勧めです。

【書名】男は匂いで選びなさい
【著者】山元大輔
【発行】ベストセラーズ（ベスト新書）
　匂わないが感じる物質が人間にはあります。また、男女の相性は血液型では決まりません。何で決まるかというと…。男性の皆さん、この本を読んでちょっと知的な会話で女性を魅了しましょう。女性の皆さん、注意しましょう。この本に限らず本の受け売り話をして得意がっているような男には（ん、僕？）。

【書名】大学教授コテンパン・ジョーク集
【著者】坂井博通
【発行】中央公論新社（中公新書ラクレ）
「大学の先生はぬるま湯につかりながら自分の領域をなかなか出ることはないのです」。確かに。「大学の先生は論文を書く人が多い。書かない人も多い。書けない人はもっと多い」。います。「理系の先生には、理論はあるが議論はない。文系の先生には、議論はあるが理論はない」。わかります。一部学生さんには読んで欲しくない箇所がある本です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
佐藤 幸生（さとう ゆきお）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】理系のための研究生活ガイド
——テーマの選び方から留学の手続きまで
【著者】坪田一男
【発行】講談社（講談社ブルーバックス）

本書は、著者の専門である「目の研究」を通して、「研究（＝知的冒険）のおもしろさ・楽しさ」を綴ったものです。研究者になろうとする諸君だけでなく、まだ研究を行ったことのない諸君にも、大学における勉強の仕方・考え方（メタ理論の考え方など）という意味で、「何か」を得られ、考えさせられる一書。

【書名】森林の思考・砂漠の思考
【著者】鈴木秀夫
【発行】日本放送出版協会（ＮＨＫブックス）

我々は普段、どちらかというと物事を分析的に見ることが多いが、逆に統合的・俯瞰的に見ることが少ない。本書は、たくさんの世界観がつまるところ、森林と砂漠という風土を背景とした２つ世界観にもとづくものであることを指摘する。この２つの世界観のどちらかによって、我々の日常の行動が規定されているのではないかという仮説から、物事を統合的・俯瞰的にとらえることの重要性を示すと同時に、人間のものの見方・考え方の発展を歴史と風土の中で追跡して壮大な物語を描いてみせている。そして、統合的・俯瞰的に見る・考える方法として、豊富なデータを分布図にすることで、「見えない関係性が見えてくる」ことを教えてくれる。

【書名】新ウイルス物語——日本人の起源を探る
【著者】日沼頼夫
【発行】中央公論新社（中公新書）

本書は、著者の研究「白血病という癌の原因となるウイルスの探索研究」の展開が、日本人の起源を解明することにつながる研究となったことの記録

である。その研究展開の道筋が克明に綴られており、研究そのものあるいは研究の展開（当初予想もしない方向への展開）のおもしろさが分かる。ウイルスのことを知らない人でも楽しく読める。

【書名】一本の道
【著者】小林勇
【発行】岩波書店

著者は岩波書店の「番頭」と言われた人であり、社長の岩波茂雄とともに岩波書店を築いてきた。本書は、その小林勇の唯一の自伝で、故郷の信濃毎日新聞に連載されたものである。「自分のことを書くのはむずかしい、恥ずかしいものであった。書き終えて空しさが残り、うれしい心持ちは起こらなかった。〈中略〉この本を書いたことによって、過去を忘れたいと思う」と綴っている。「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」（斎藤茂吉『あらたま』所収）がぴったりの人生だったのだろうと思う。彼の著書に『夕焼』（文藝春秋）があり、人生において学び、味わいたい多くの言葉が綴られている。

【書名】徳川家康 全２６巻
【著者】山岡荘八
【発行】講談社（山岡荘八歴史文庫）

本書は、終戦間もない時期に、足掛け 18 年の年月を費やして書かれた全 26 巻の長編小説（400 字詰め原稿用紙で 17,400 枚）である。私は、丁度「仕事の仕方」に悩んでいた 30 代前半の時期に読んで感動した一冊です。ある先生が、「今年の夏休みは何をしようか。まとまった長い時間が取れるときは、毎年それなりの取り組みをしてきた」と言うのです。私にはそんな経験がなかったのですが、このお話をお伺いして挑戦したのが本書でした。6 月頃から読みはじめて、夏休みに読み終えました。徳川家康と言えば「家康の難題」というのがある。なぜ難題を出すのか、どんなことが難題なのか、などといったことは家康の生い立ちの中にヒントがあるようで、人間としての生き方を考えさせられた気がします。戦乱の世を治めて 300 年余の歴史を作り上げてきた礎に何があったのかという想いで、もう一度読んでみたいと思うこの頃です。

【書名】坂の上の雲 全８巻
【著者】司馬遼太郎
【発行】文藝春秋（文春文庫）

本書は、大学時代の恩師が読んでいるというので、友人とともに読んだ一冊です。恩師は正岡子規が好きで読んだようですが、私は秋山兄弟に興味を持ちました。『徳川家康』が「大将とは」を描いたものであるならば、本書は「参謀とは」を描いたのだと思います。明治の礎をつくる大きな時代の流れの中で、若き彼らが人生を懸けて取り組んだ事、物と取り組むに際しての「想い」に胸を熱くした思い出があります。長編であるが、男と女が主題にはなっていない点でも興味が引かれた。前述の『徳川家康』とともに、時代を生きる、年代を生きるとはどういう事かを考えさせられた一冊でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
垣田 邦子（かきた くにこ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】ひかりごけ
【著者】武田泰淳
【発行】新潮社（新潮文庫）

食人した者は首の後ろに、‘ひかりごけ’に似た光を放つ輪が出るという。そしてその光は‘食人したことのある者’には見えない。酷寒の知床岬、遭難船の船長が仲間の肉を食し生き延びた事件をもとに書かれた作品。‘食人’は何を表しているのだろう。主人公の船長が繰り返す「我慢している」という言葉の意味は何だろう。何度読み返しても再び開いてしまう本です。（この作品は ’70 にオペラ「ひかりごけ」として劇団四季により上演されましたが、その当時‘前衛的’だったモノクロ・ミニマルな舞台美術が、劇団四季のウェッブサイト[http://www.shiki.gr.jp/applause/hikarigoke/] に載っています。今見ても結構きれい。オペラの DVD (2009)もお薦めです。）

【書名】Surely You're Joking, Mr.Feynman! : Adventures of a Curious Character
【著者】R. Leighton, R. P. Feynman
【発行】Vintage; New edition
★飾らない英語で書かれています。

【書名】ご冗談でしょう、ファインマンさん 上・下
【著者】リチャード・フィリップス・ファインマン（大貫昌子 訳）
【発行】岩波書店（岩波現代文庫）

（ノーベル賞も受賞した）物理学者ファインマン氏は、楽しいことをみつける天才だ。絵を描き、ボンゴをたたき、ストリップ劇場に通い詰める。でもたぶん一番好きなのは‘いたずら’。この本にも、MIT やプリンストンの学生だった頃の‘痛快いたずらエピソード’がたくさん出てきます。そしてそんな中に、ものごとの本質を捉えるためのヒントが…。

【書名】Kon-Tiki: Across the Pacific by Raft
【著者】Thor Heyerdahl
【発行】Skyhorse Publishing

【書名】コンチキ号漂流記
【著者】トール・ハイエルダール（神宮輝夫 訳）
【発行】偕成社（偕成社文庫）

原著は「一般」を対象に書かれたものなのに、日本語版は「児童向け」のみ。（対象年齢は、小学上級「から」となっているので悪しからず。）

ノルウェイの民族誌学者ハイエルダールは、南米からポリネシアへの移住が可能であったことを証明するために、インカ時代と同じバルサ材でいかだ（「コンチキ号」）を組み、ペルーから大海原に漕ぎ出す。自説は学会でこそ評価されなかったが、彼の冒険心と実行力は世界中の人に感動を与えた。一緒に航海している気分になれる本です。なお、2005 年にはフランス人女性がコンチキ号と同じルートで単独航海に挑み、その航海記が今年（2012 年）の春に出版されたばかり。ついでに紹介します。（Maud Fontenoy 著、Challenging the Pacific: The First Woman to Row the Kon-Tiki Route［英語］、Arcade Publishing 発行）

【書名】白骨花図鑑
【著者】甘糟幸子
【発行】集英社

４つの短編を収めた本。いずれの短編も、現実と空想、日常と非日常の間を（やや乱暴に）行ったり来たりする感覚が心地よい。残酷をさらりと、生々しさをエレガントに表現。ちなみに著者は、野草料理の本も執筆する「ナチュラリスト」の草分け。

【書名】愛しのチロ
【著者】荒木経惟
【発行】平凡社（平凡社ライブラリー off シリーズ）

写真家アラーキーが溺愛する飼い猫チロの写真集。文字の部分が少ないので読書マラソン用にはどうかと思いましたが、推薦します。世の中のネコ写真のほとんどは‘ねらい過ぎ’で気持ちがわるくなりますが、アラーキーの写真はどれも無理がなくて素直。プロだからいい写真がとれているのではなく、彼の中に何か根源的なやさしさがあって、それが１枚々々ににじみ出ている感じがします。独特のアラーキー語で綴られる文章が、おかしくてちょっと哀しくて、味わい深いです。（付記：2010 年、チロ 22 才で永眠。河出書房新社より写真集『チロ愛死』。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
D. Berducci（ドミニク バデューチ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】心の概念
【著者】ギルバート・ライル（G. Ryle）
（坂本百大、宮下治子、服部裕幸 訳）
【発行】みすず書房

Especially read chapter 1 (デカルトの神話). Read it three times. The first time you will think, 'This is absurd (不合理な).', the second time, 'This is interesting.', and the third time, you will think Ryle is a genius. Then read "ウィトゲンシュタイン".

【書名】ウィトゲンシュタイン
【著者】A・C・グレーリング（岩坂彰 訳）
【発行】講談社（講談社選書メチエ）

Read this one after you read "心の概念". "心の概念" will prepare you for this book. After you read this, your way of thinking (考え方) will be changed forever. L.ウィトゲンシュタイン was an engineer (工学者) who became a philosopher (哲学者). Maybe you are next!

【書名】心の声――媒介された行為への社会文化的アプローチ
【著者】ジェームス・V・ワーチ
（田島信元、佐藤公治、茂呂雄二、上村佳世子 訳）
【発行】福村出版

Do you believe mind and body are two different phenomena (現象)? Are you a dualist (二元説論者)? After you read this book you will see that you are wrong. L.ヴィゴツキー is a Marxist psychologist (マルクス主義心理学者) and a monist (一元説論者). He will show you that mind (心) is created from experience (経験).

【書名】語る身体・見る身体
【著者】山崎敬一、西阪仰
【発行】ハーベスト社

Read chapter 1. This will introduce you to the universal structure of conversation (全称的な会話構造). After you read it, you will understand how conversation, both English and Japanese, works. In particular, chapter 1 will introduce you to the 'turn-taking system' of conversation (会話の順番どりシステム). It will also show you that society is based on conversation through the turn-taking system of conversation.

【書名】Grammar in context 1 and 2
【著者】Sandra N. Elbaum
【発行】Heinle & Heinle Publishers

Sorry, but you have to study English to learn English. This book is a good self-study book. It has many many clear examples of all types of grammar in context; there are articles to read from easy to advanced, and a CDrom. All of you can do book 1, so I recommend to begin with book 3. This will challenge you! This book, if you use it, can help you in all English skills.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
中嶌　崇（なかじま たかし）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】死者達（*The Dead*）
【著者】ジェームス・ジョイス
【発行】新潮社（新潮文庫『ダブリン市民』に収録）ほか

これはアイルランドが生んだ国民的作家、ジェームス・ジョイスが若かりし頃（1914 年）出版した短編集『ダブリン市民』（*The Dubliners*）の最後に収められている作品です。ジョイスの作品は後期になるほど難解になりますが、『ダブリン市民』は比較的読みやすく、敷居が低いといえるでしょう。ジョイスの近・現代文学に対する影響は絶大なものがありますが、その基本的特徴がすでにここにすべて現れているといっても過言ではありません。

僕はこの作品をアメリカの大学の英文学のコースで読みましたが、完璧にノックアウトされ、しばらく立ち上がれませんでした。今もその影響は強く残っています。それどころかその影響があまりに強かったために、彼の最高傑作といわれる『ユリシーズ（*Ulysses*）』は未だに読んでいません。本はずっと前に買ってはあるのですが、怖くて読めないのです。

名映画監督のジョン・ヒューストンもこの作品に強く影響を受け、これを忠実に映画化しています（邦名「ザ・デッド」、DVD も買えます）。奇しくもこれは彼の遺作になりました。

ジョイスの作品は著作権が切れているために、多くのものがインターネットからダウンロードできます。和訳でも結構ですが、できれば一度原文でも読んでもらいたいと思います。読むときには次の事柄を事前に調べ、頭に入れて読むと良いでしょう。

・「意識の流れ」：ジョイスが創造した文学の手法のひとつ
・言行一致：文体と現実を一致させること
・エピファニー（Epiphany）：元は宗教的な意味をもつ言葉ですが、ジョイスはそれに独自の意味を加えました
・アイルランドとイギリスの宗教的・政治的対立関係
・アイルランドの文化、特に音楽との深い関わり

【書名】東と西の語る日本の歴史
【著者】網野善彦
【発行】講談社（講談社学術文庫）

著者の網野善彦氏は惜しくも最近他界されましたが、彼の研究が日本の歴史学に残した足跡の大きさは今後も色あせることは決してないのではないでしょうか。以前の古色蒼然とした一元的・ドグマ的歴史観を根本的に見直し、日本の国の成り立ちや文化の生成過程を新しい切り口で、しかもとても分かりやすく説明してくれます。この本を読んで、まるで日本中世の人々が生き返って語りかけてくるような興奮を覚えました。それと同時に「なるほど」と納得のゆくことが多く、「目から鱗が落ちる」体験を何度もしました。網野氏の著作の多くは文庫本になっていますから、是非手に取って読んでみて下さい。今までの思い込みをひっくり返す新しい発見や、長い間持っていた疑問が氷解するようなことが必ずあります。

知識は世界の見方を変えてくれます。時間は少なくとも概念的には直線的に過去から未来へ繋がっていますが、歴史は時間の流れに沿って広く分布してしまっているのではなく、重層的に重なっています。現在のすぐ裏が中世なのです。

【書名】逝きし世の面影
【著者】渡辺京二
【発行】平凡社（平凡社ライブラリー）

もう一冊歴史関連の本を挙げます。上述の網野氏の本は日本中世を題材にしていますが、この本はぐっと下って江戸後期から明治時代の文化史を取り扱っています。江戸時代を再評価することがしばらくブームでしたが、この本はその嚆矢のひとつといえるのではないでしょうか。面白いのは渡辺氏は江戸末期から明治初期に日本に滞在した外国人の書き残した本、日記、旅行記、手紙、報告書等から当時の日本人のあり方や文化の特徴を再構築しようとしていることです。つまり異邦人の視点を通して日本人、日本文化はどうであったのかを分析しているわけです。通常私たちは日本文化の特徴について、あまりにも当たり前であるために気がつきませんが、外国の文化に接したとき、その文化の特徴にはとても敏感になるのが普通です。渡辺氏はこの「文化の鏡」を利用しているわけです。

さて、そこから浮かび上がってくる私たちの祖先の姿、生き方、はたまたかつて存在した「日本という文明」のあり方は…？

そこから先は実際に読んでもらう以外にありません。おそらく驚き、発見、感動とともに、持って行き場のない深い寂寥感を持つのではないかと思います。必読の書です。

【書名】失敗の本質――日本軍の組織論的研究
【著者】戸部良一、寺本義也、鎌田伸一、杉之尾孝生、村井友秀、野中郁次郎
【発行】中央公論新社（中公文庫）

この本が最初に出版されたのは 1984 年です。太平洋戦争が終わって約 40 年後のことです。むしろこのような研究が出るようになるまでに 40 年が必要だったと言った方が正しいかもしれません。

この本は日本に組織が作られた場合、その組織がどのように機能するのかを研究した組織論の本です。題材として扱っているのは旧日本帝国陸・海軍です。内容は専門的ですが、けっして難しくありません。むしろ戦史データを丹念に検証し、各作戦の進行過程を辿って分析することで非常に分かりやすく、かつ説得力のあるものになっています。また敵となったアメリカ軍の組織とも比較していますから、優れた比較文化論にもなっています。

ここで指摘されている事柄は、現在でも十分通用することばかりです。幾つか挙げましょう。

- 日本軍は始めにグランド・デザインや原理があったというよりは、現実から出発し状況ごとに時には場当たり的に対応し、それらの結果を積み上げてゆく思考方法が得意であった。（日本的帰納法、p.200）
- 米海兵隊が水陸両用作戦のコンセプトを展開するプロセスは、演繹・帰納の反復による愚直なまでの科学的方法の追求であった。（p.202）
- 与えられた目的を最も有効に遂行しうる方法をいかにして既存の手段群から選択するかという点に教育の重点が置かれることになった。学生にとって、問題はたえず教科書や教官から与えられるものであって、目的や目標自体を創造したり、変革することはほとんど求められなかったし、また許容もされなかった。（p.234）
- 日本軍は環境に適応しすぎて失敗した。（p.246）

最後の指摘は言うまでもなく今話題になっている日本の「ガラパゴス化」と呼ばれているものです。バブルの崩壊を「第二の敗戦」と言った人がいたように、また現在の日本の閉塞状況も日本のガラパゴス化からきていると言われているように、ここで指摘されている事柄は今でも本質を衝いて外れま

せん。

人は組織の中で過ごす時間がとても多いのが普通です。特に仕事ではそうでしょう。そこで日本の組織というものはどのような原理で動くのか、どのような特徴を持っているのかを理解しておくことは、自分と組織との関係を客観的に見てゆく上でとても大切です。こうした視点を持っていれば、組織の犠牲になろうなどとは夢にも思わないでしょう。過労死等してはならないことがよく分かります。

なお副読本として中根千枝の名作『タテ社会の人間関係――単一社会の理論』（講談社現代新書）を読んでおくとなお理解が深まることを付け加えておきます。

【書名】母性社会日本の病理
【著者】河合隼雄
【発行】講談社（講談社＋α文庫）

引きこもり、ニート、家庭内暴力等の問題が深刻化していると言われていますが、実はこのような現象はずっと以前からあったのであり、その意味では注目されるようになったから今深刻化していると思われているだけとも言えます。

この本は日本で最初にユング派の精神分析家となった河合隼雄氏の数多い著作のひとつです。河合氏の分析は日本人の精神構造を明らかにする面で多大な貢献がありました。特に注目すべきは日本の神話が日本人の心理構造を如実に反映しているのではないか、との仮説です。いわば日本神話に登場してくる人物たちが私たちの心の中に起こっていることを代わりに行ってくれているという発想です。この仮説に立ち、彼は「父性原理」・「母性原理」、「場の理論」、「中空構造」等数々の重要なアイデアを提唱しています。

彼の分析は上述した社会現象に非常に有効な視点を与えてくれるだけでなく、異文化理解にも重要な手掛かりを提供してくれます。彼は文化庁長官の職にありながら惜しくも他界されました。しかし彼の日本人の精神構造に対する鋭い見識は決してその重要性を失うことはないと思われます。日本が国際社会・経済にますます組み込まれてゆく中で、これからを生きる人にとって必読の書といえるでしょう。できればこの本の内容をもって『失敗の本質――日本軍の組織論的研究』を再分析すると、より双方の理解が深まります。

【書名】戦争と平和

【著者】レフ・ニコラエヴィッチ・トルストイ
【発行】新潮社（新潮文庫）、岩波書店（岩波文庫）ほか

若い頃トルストイの作品は翻訳で読めるものはほとんど全て読みましたが、「戦争と平和」は特に印象が深く、３回読んだ記憶があります。「超」が付く程の長編ですが、「アンナ・カレーニナ」と双璧をなす名作で、どちらも「世界の名作１０選」などというアンケートには必ず選ばれています。

ナポレオン戦争前後の帝政ロシアの貴族社会が舞台になっていて、ナポレオンのロシア侵攻と敗退という歴史的事件に、ロシア社会の変遷と人間模様を重ね合わせた壮大なスケールを持つ作品です。名門貴族出身で生活に何ら不安のないトルストイが、自身の魂の求済にロシアの素朴な農民文化に惹かれてゆく心の葛藤が底辺にあり、それが作品に独特の深みを与えています。トルストイは、その非暴力主義や独自の宗教観・人生観で現在でも多大な影響を与え続けていますが、夏休みや長期の休暇を全部充てても読む価値はあります。

【書名】奥の細道
【著者】松尾芭蕉
【発行】岩波書店（岩波文庫）、角川書店（角川ソフィア文庫）ほか

日本文学の到達点の一つと言っても過言ではないでしょう。小さなありふれた心象風景の中に、日本人の持つ人生観、自然観、感性の全てを高いレベルで芸術的に統一させた松尾芭蕉の独創には驚くばかりです。このようなユニークな作品は世界に例を見ません。これを原語で味わうことができるのですから、日本語を母語とすることはなんと幸せなことでしょうか。芭蕉は旅の中で富山を含め北陸を通っています。北陸地方についてはあまり多くを語ってはいませんが、今は寂れてしまった旧街道も、彼の足跡を感じながら歩くと風景がまた違って見えて来ると思います。

【書名】失敗の本質――戦場のリーダーシップ編
【著者】野中郁次郎（編）
【発行】ダイヤモンド社

前回推薦した『失敗の本質』の続編が四半世紀を経て出ました。新しい本ですが、関連上取り上げておきます。「戦場のリーダーシップ編」では、前回の組織論を敷衍した上で、それぞれの作戦・戦闘を指揮した司令官の資質と決断に焦点を当てています。経済学者でノーベル賞を受賞したオリバーE.ウィリアムソンの言う「取引のコスト」がどのように組織内での人の行動を規制するかを理解するだけでも読む価値があります。職業人として組織に入る前に読んでおくとよいでしょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
須田 孝司（すだ こうじ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】三四郎　　それから　　門
【著者】夏目漱石
【発行】新潮社（新潮文庫）、岩波書店（岩波文庫）ほか

夏目漱石の三部作です。少年から青年、青年から大人へと成長する過程において感じる悩み、苦しみ、あこがれ等、著者が生きた時代とは全く異なっていますが、現代にも通じる様々な境地を疑似体験・共感することができます。しかし、それぞれの本の結末は…、未だに理解できません。なぜあのような道を選んでしまったのでしょう。皆さんもちょっと考えてみませんか？

【書名】英文法の疑問――恥ずかしくてずっと聞けなかったこと
【著者】大津由紀雄
【発行】日本放送出版協会（生活人新書）

「英文法なんていくら習ったって、英語が使えるようにはならない」と思っていませんか？ 英文法はそのまま覚えることが必要とされる場合もありますが、本書を手に取り、なぜそうなっているのか理屈をちょっと考えてみましょう。本書はきっと皆さんに英文法への取り組み方について、なにかしらのきっかけを与えてくれると思います。

【書名】項羽と劉邦 上・中・下
【著者】司馬遼太郎
【発行】新潮社（新潮文庫）

司馬遼太郎は様々な史記を書いていますが、彼の作品の中で最初に読んだのがこの本でした。そして、読書嫌いだった私も、司馬遼太郎の世界にどっぷりとはまってしまいました。この本が有名になったおかげでRPGソフトが開発されたとか…。自分でじっくり司馬遼太郎の世界を体験してみませんか？

【書名】ノルウェイの森 上・下
【著者】村上春樹
【発行】講談社（講談社文庫）
数年前、長編小説『１Ｑ８４』が話題を集めましたが、約 25 年前に書かれた本書も世界中でかなり話題を集めました。そして、やっと最近、松山ケンイチが主演し、映画にもなりました。タイトルを見ると何の話か全く想像できませんが、このタイトルはビートルズのアルバム『Rubber Soul』に収録されている楽曲に由来しているそうです。37 歳の主人公ワタナベトオルが 20 歳の頃の出来事を回想するということで物語は進んでいきます。しかし、内容が実に濃く、重い。君たちはこの重さに耐えられるでしょうか？

【書名】Love Story
【著者】Erich Segal
【発行】HarperTorch（Reissue 版）
日本では数年前に「セカチュー」（片山恭一著『世界の中心で、愛をさけぶ』）現象が起こり、純愛ブームなる言葉も巷でもてはやされましたが、本書は約 40 年前に書かれた純愛小説（ラブ・ストーリー）です。日本では『ある愛の詩』というタイトルで映画も上映されました。「セカチュー」にしろ、『Love Story』にしろ、愛する人が病気になり、愛する人の死に直面するという確率は非常に少ないかもしれませんが、自らの姿を主人公に重ね合わせることができると思います。本を読む場合も、DVD を見る場合も 1 人になることをお勧めします。

【書名】孔子
【著者】井上靖
【発行】新潮社（新潮文庫）
「我十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る」という台詞を一度は聞いたことがあるでしょう。これは、『論語』の中で孔子が語ったとされる詞です。孔子は、紀元前の中国の学者、思想家、教育者であり、その教えは現在まで語り継がれており、日本でも漢文などでなじみがあると思われます。本書は、その孔子の生涯について、小説という形で物語を作り上げています。社会に出る前に、一度読んでみることをお勧めします。上司とのやり取りを行う上で、役立つことがあるかもしれません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
中川 佳英（なかがわ よしひで）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】タンパク質の一生——生命活動の舞台裏
【著者】永田和宏
【発行】岩波書店（岩波新書）

本書は、細胞内にあって長い間ヴェールに包まれてきたタンパク質製造工場の内部に案内してくれます。この製造工程は、驚くほど精密であると同時に、難所もあって、細胞はタンパク質製造にたびたび失敗します。しかし繰り返される失敗にもめげず、彼らは何とけなげに、生命の火を消さないという使命を果たそうとすることか。この本を読んだ後は、自分の体をこれまで以上にいたわりたくなります。

【書名】審判
【著者】フランツ・カフカ
【発行】岩波書店（岩波文庫）、角川書店（角川文庫）ほか

あるとき突然、身に覚えがないのに「お前は有罪だ。逮捕する。」と言われたら、どうしますか？

主人公Kはこの不可解な逮捕に抗し、断固戦うことにしたのですが…。カフカのいわゆる不条理の世界は、近代的な正面の裏に前近代が鎮座する日本の社会でこそリアリティを持っていると言えるでしょう。実社会に入る前の予防接種としてもお奨めできます。

【書名】若きウェルテルの悩み
【著者】ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ
【発行】岩波書店（岩波文庫）、新潮社（新潮文庫）ほか

青春という言葉は死語になっているようですが、私は好きです。かなわぬ恋にのめり込んだ人には、世の中を支えている仕組みが からくりのように見えてきます。欲しいものに対して、私たちが子供のようには手を出せないのはなぜなのか。こんなシンプルな疑問に全身全霊で答えを出そうとした書。

【書名】金閣寺
【著者】三島由紀夫
【発行】新潮社（新潮文庫）

理想的なものは、当たり前のことながら、現実に手が届かないからこそ、そう呼ばれるのであり、高天に輝いているのです。金閣寺の美はそれに阻まれているという思いによって、むしろ主人公の心をいっそう虜にします。皆さんのなかにも、この種の自縄自縛に苦しんだことのある人がきっといるでしょう。そういう人は、小説の最後で主人公がタバコを一本吸うときの気持ちが実感できます。（断わっておくと、私はタバコを吸いません。）

【書名】東京大空襲――昭和 20 年 3 月 10 日の記録
【著者】早乙女勝元
【発行】岩波書店（岩波新書）

ほぼ半世紀前の 3 月 10 日深夜、東京下町の人口密集地域は、制空権を完全に手にした数百機の米軍の無差別絨毯爆撃に曝されました。ガスバーナーのように吹き上がる火炎に、生きながら黒こげ死体にされていく人々を前にして、もはや戦争開始の非がどちらにあるのかを問うことは空しい。阿鼻叫喚の中から、人間を物とみなして破壊する行為はすべて悪であるというメッセージが聞こえてきます。

県立大学
読書マラソン
コーナー
読書マラソン
コーナー
読書マラソン
コーナー

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
中　哲裕（なかば てつゆう）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】椿姫
【著者】デュマ・フィス（新庄嘉章 訳）
【発行】新潮社（新潮文庫）

高級娼婦マルグリットが、アルマンの純粋な愛情に浄化されていく。アルマンの涙を見て、金勘定抜きの、自己犠牲の伴った献身的な愛情に目覚めていく。多分、現実にはあり得ないことなのだ。だから、古典的恋愛小説として多くの人に読まれ、ヴェルディの歌劇にもなり、竹宮恵子の漫画『風と木の詩』の準拠ともなった。なお、ダンテの『神曲』によれば、肉欲ではなく「恋に燃えた魂」は、地獄や煉獄ではなく、天国の「金星天」に生まれることができるとのこと。ヨーロッパ・ロマン主義時代の代表的な恋愛小説である。作者は『モンテ・クリスト伯（巌窟王）』、『三銃士』を書いたアレクサンドル・デュマの息子。

In its leaves that day
We read no more.

出典: *Canto V.*, *lines* 134, 135, “DANTE’S VISION, The Vision of Hell”.（部分, 2 頁参照）

【書名】オセロー
【著者】ウィリアム・シェイクスピア（小田島雄志 訳）
【発行】白水社（白水Ｕブックス）

2007 年 10 月、蜷川幸雄演出の「オセロー」公演を観て…。舞台の前半の２時間は長く辛かったけれど、後半はぐいぐい引き込まれていった。「人間、この愚かなもの」という言葉が思い浮かんだ。男だけの戦場に妻のデズデモーナを連れて行くという状況設定の異常さ。いともあっさりとイアーゴーの言葉を信じてしまう愚かさ。亭主の嫉妬が分からず、副官の弁護をするデズデモーナの迂闊さ。女好きで、酒飲みで、馬鹿な副官…。でもそういう愚かで欠点の多い人間を、シェイクスピアは大好きだったんだ。

【書名】チボー家の人々〈１〉　灰色のノート
【著者】ロジェ・マルタン・デュ・ガール（山内義雄 訳）
【発行】白水社（白水Ｕブックス）

第一次世界大戦前という時代設定である。チボー家のジャックとフォンタナン家のダニエルが灰色のノートに自分たちの友情を書き付けていた。それが学校の先生に没収され、ジャックもダニエルも家出をはかる。カトリック（チボー家）とプロテスタント（フォンタナン家）の宗教をめぐる反目、ジャックとダニエルの度を越した友情、情熱的で我の強いジャックと落ち着いた教養を身につけたアントワーヌ、保守的で頑固な父親のチボー氏と放蕩な亭主のジェローム…。いろいろな人物や事件が対照して書かれるが、ここに書かれていることは今なお新しい。

【書名】夜と霧――ドイツ強制収容所の体験記録
【著者】ヴィクトル・エミール・フランクル（霜山徳爾 訳）
【発行】みすず書房

ナチス・ドイツは第二次世界大戦中に強制収容所で 600 万人を超える無辜のユダヤ人を殺害した。その強制収容所体験を心理学者の立場で記録したものである。極限の状況になるとこんなことまで「人間」はやってしまうのかというショックと、追いつめられれば自分だって加害者の側に立つかもしれないという懼れを抱かされる。同時に、収容所の中でどうして自分を支えたかという記録は、人生を生きていく支えともなってくれる。

【書名】虹いくたび
【著者】川端康成
【発行】新潮社（新潮文庫）

百子の母親は水原との恋に破れ、自殺した。恋人の啓太は、特攻隊で散華。それから百子の少年狂いが始まる。キリキリと刃物を嚙むような危ない恋に夢中になるのは、心の中で痛む傷があるからだ。百子が竹宮少年の子どもを流した時、ちょうどその時間に少年も自殺する。昭和 25 年、康成がこの小説を書いていた時、甕にさした海棠の花を見て、「一輪の花美しくあらば、我もまた、生きてあらん」とつぶやきながら、自殺への思いと戦っていた。悲しみと苦しみが昇華されて、冬の虹のように美しい散文詩が紡ぎ出された。川端文学の最高峰である。

【書名】されどわれらが日々――
【著者】柴田翔
【発行】文藝春秋（文春文庫）

世界中の大学が学生たちの反乱で熱かった頃、学園紛争を扱って芥川賞をとった作品は『赤頭巾ちゃん気をつけて』(庄司薫)、『僕って何』(三田誠広)など、いくつかある中で、今でも若い人に読まれ続けている作品である。「今を生きる」というのはどういうことなのだろう。「これは永遠の別れではない。あなたと再び会うための別れだ」という節子は、愛する大橋に再び会うことができたのだろうか。出版されて 40 年が経つ。ご自分の学生生活と比較しながら読んでほしい。

【書名】道元禅師 上・下
【著者】立松和平
【発行】東京書籍

『道元禅師』は禅への入門書として。大乗（北伝）仏教の一つの帰結である「草木国土 悉有仏性（しつうぶっしょう）」について、「草も木も、生きとし生けるもの総てが仏となることができるとすれば、今更仏道を修することの意味はどこにあるのか」、そういう疑問を持って道元は中国に渡った。その疑問はこの本を読み終えてもなお読者の心に残るのだが…。

中村勘太郎主演の映画「禅 ZEN」も併せて見ると楽しい。「おくりびと」でアカデミー賞をとった本木雅弘主演の「ファンシィダンス」もどうぞ。岡

野玲子（『陰陽師』の著者）のおちゃらけ漫画の映画化だが、意外と奥行きがある。

【書名】現代語訳『正法眼蔵』　全１２巻　　無門関提唱
【著者】道元（西嶋和夫 訳）　　山本玄峰
【発行】金沢文庫　　大法輪閣

『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』は道元の主著。実践できるかどうかは別にして、ものごとをまっすぐに考えるとこうなるという本。「山が歩く」や「石には石男と石女があって、石女は子を産む」という面白い表現もある。ある程度の唯識学の知識があれば、分かりやすい。１年ほどかけてゆっくりと読むこと。なお、「仏性（ぶっしょう）」について、「あるとも言えるし、無いとも言える」というのが道元の帰結である。

「無門関」とは門の無い関所のこと。入口がない関所とも、どこからでも入れる関所とも考えられ、そういう融通無碍（むげ）なところが禅の魅力である。何か大切なことを問われると必ず指を１本立てたという「倶胝竪指（ぐていじゅし）」や、三島由紀夫の『金閣寺』に出て来る「南泉斬猫（なんせんぜんみょう）」など、馴染みの話もある。山本玄峰老師の『無門関提唱』は歯切れが良くて、名著である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
丸山 義博（まるやま よしひろ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】５分でたのしむ数学５０話
【著者】エアハルト・ベーレンツ（鈴木直 訳）
【発行】岩波書店

ドイツの全国紙として初めて 100 回にわたって連載された新聞コラムです。紹介ページからの抜粋と一部内容の紹介。

・聖書に書きこまれた円周率の話
・想像力を超える巨大数
・もっとも美しい公式（オイラーの公式）：０、１、π、ｅ、そしてもっとも重要な複素数ｉの間に１つの関係がある（１にｅのｉπ乗を加えると０が出現する）。
・数学にとって最も重要な数は０と１（その理由は、本質的には０を加えても、１を掛けても…）、その次に必要となるのは円周率π、増殖過程を記述するには底ｅは欠かせない、あらゆる方程式が解けるためには数の領域を複素数にまで広げなければならない（詳細は読んでのお楽しみ、第１８話より）。
・自分の並んだ列がいつも一番遅いと感じられる本当の理由は何か。

【書名】続 ５分でたのしむ数学５０話
【著者】エアハルト・ベーレンツ（鈴木直 訳）
【発行】岩波書店

話題のタイトルの紹介。　読んで楽しい本、自然に教養が身につきます。

・私は数学が嫌い、なぜかといえば…
・ＣＤプレイヤーのなかの数学
・いちごアイスは命とり？
・想像力を超える世界
・だから数学が好きになる

【書名】図解雑学シリーズ
【発行】ナツメ社

たくさんありますが、それぞれの（学科の）専門分野に関した本を読むことでもよいです。イラストが豊富、読んでいて楽しい。よみやすく自然に知識が身についていきます。

【書名】日本で「一番いい」学校――地域連携のイノベーション
【著者】金子郁容
【発行】岩波書店

将来、教員を目指そうと思っている人。「学校」について考えている人。

問題、日本で「一番いい」学校はどこにあるのか（答えは１頁目に出てきます）。

・地域が支える学校
・いい学校を作る
・すべての学校を日本で「一番いい」学校にするために

【書名】いのちをはぐくむ農と食	**食糧問題ときみたち**
【著者】小泉武夫	**吉田武彦**
【発行】岩波書店（岩波ジュニア新書）	**岩波書店（岩波ジュニア新書）**

上記２冊は、いずれもトピックゼミで教科書あるいは授業でも資料として配布し使っている本です。食糧問題を、一人ひとりが身近な問題として考えていただきたいから。自然に教養が身につきます。肩の凝らない本です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
前澤 邦彦（まえざわ くにひこ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】翔ぶが如く 全１０巻
【著者】司馬遼太郎
【発行】文藝春秋（文春文庫）
明治維新から西南戦争にいたる時代の政治状況を扱った時代小説。ＮＨＫの大河ドラマにもなった。現代日本の官僚制度はこの時代に作られ、戦後の今も基本的に変わっていないと著者は言う。

【書名】レイテ戦記 上・中・下
【著者】大岡昇平
【発行】中央公論新社（中公文庫）
太平洋戦争の激戦地フィリピンのレイテ島における戦闘の記録。戦争指導部の無責任な方針が、戦場をいかに悲惨なものにしたか。消耗率９７％というデータが語る。

【書名】零戦燃ゆ 全６巻
【著者】柳田邦男
【発行】文藝春秋（文春文庫）
太平洋戦争における日米航空戦の記録（ノンフィクション）。日米の技術開発における思想の違いを描いている。太平洋戦争史としても参考になる。

【書名】ドイツ・イデオロギー
【著者】カール・ハインリヒ・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス
（廣松渉 編訳）
【発行】岩波書店（岩波文庫）
歴史とは何か。歴史というものをどう捉えるべきか。本書は１９世紀半ばに執筆され、唯物論的歴史観誕生の書として著名である。紹介した岩波文庫版は、少し読みにくいかもしれないが、内容はシンプルである。

【書名】どくとるマンボウ青春記
【著者】北杜夫
【発行】新潮社（新潮文庫）

著者の旧制高等学校－大学時代の回想記。時代は食糧難の戦後、青春とは決して明るいものではないと著者は言うが、「どくとるマンボウ」シリーズの１冊として、笑いながら読める。

【書名】砂の器 上・下
【著者】松本清張
【発行】新潮社（新潮文庫）

松本清張のサスペンス小説には、戦争に翻弄され、戦後を生きる過程で犯す犯罪を扱ったものが何篇かあるが、『砂の器』はその中の傑作であろう。

ライ病の問題や低周波音の被害なども扱われていて興味深い。2009 年は清張生誕 100 年に当たり、再ドラマ化された作品がテレビ等で放映されている。

【書名】羊の歌――わが回想
【著者】加藤周一
【発行】岩波書店（岩波新書）

2009 年に亡くなった著者については新聞、ニュース等で報道されたので、ご存知の方も多いと思う。戦争中医学生、医局員として過ごした著者が、当時の知識人が戦争をどう捉え、どう対処していたかを描く。1970 年頃に月刊誌に連載された記事を単行本にしたものである。

【書名】フェルマーの最終定理
【著者】サイモン・シン（青木薫 訳）
【発行】新潮社（新潮文庫）

$x^n + y^n = z^n$　この方程式は n が２より大きいとき整数解を持たない。

この単純でおよそ役に立ちそうもない定理が証明されたからといってどんな意味があるのか。そう思われた方は一読してください。数学の専門家ではない一般向けの本なので、誰でも読めます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
鈴木 敏彦（すずき としひこ）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】実験医学序説
【著者】クロード・ベルナール（三浦岱栄 訳）
【発行】岩波書店（岩波文庫）
この本は1800年代半ばに書かれたものであるが、その内容は実験とは何か、どのように実験すべきかということについて、現在の研究者にも十分通じる考え方が記されている。医学・生理学関係者だけでなく、実験に関わるものの心構えとして、心に刻んでおきたい言葉が多く見られ、これからの学生には是非読んでもらいたい本の１冊である。

【書名】今さら聞けない科学の常識――うろおぼえを解消する１０２項目
【著者】朝日新聞科学グループ 編
【発行】講談社（講談社ブルーバックス）
うろおぼえの科学知識って、意外に多いもの。「常識」と思われている内容であればあるほど、今さら人に聞けないものです。この本では、「自分でもはっきりと答えられない事項を選んで、自分の子どもにもわかるように説明する」という方針のもと、科学技術取材の第一線で働く記者たちが、読者と家族のために書いた懇切丁寧な解説が満載です。（本書巻頭言より抜粋）

【書名】剣客商売シリーズ
【著者】池波正太郎
【発行】講談社、新潮社（新潮文庫）
今の私が熱中しているのが時代小説で、その中でも池波正太郎の作品が大好きである。表題のシリーズは、江戸時代（田沼時代）に剣術を生業としている秋山小兵衛親子の生き方に様々な事件をからませて描いている。この作品を含め、「鬼平犯科帳シリーズ」、「仕掛け人藤枝梅安シリーズ」など、この著者の多くの作品には江戸時代の料理の内容が、その作り方も含めて詳細に描写されており、読者に物語以上にこれらのものを食べたくさせること請け合いである。

【書名】Ｘの悲劇　　Ｙの悲劇　　Ｚの悲劇　　レーン最後の事件
【著者】エラリー・クイーン
【発行】東京創元社（創元推理文庫）ほか

著者はエラリー･クイーンだが、この４部作の時のペンネームは、バーナビー・ロスであったことを後に知った。エラリー･クイーンという名前も、フレデリック・ダネイとマンフレッド・ベニントン・リーという従兄弟同士の２人が共同で執筆するためのペンネームである。

高校生の時に初めて上記の本を読み、それ以来すっかり推理小説ファンとなった。この小説の後半には「読者への挑戦」として、犯人を推理させる場面がある。それまでに、著者は推理させる根拠を全て書いているのである。この趣向が私を虜にした。エラリー・クイーンの作品は、上記のもの以外にも多数出版されている。

ちなみに推理小説に関しては、学生時代から今に至るまでに、外国人や日本人の作品をほとんど文庫本だが数百冊購入し、今も家の書斎に納めている。

【書名】沈黙
【著者】遠藤周作
【発行】新潮社（新潮文庫）

この作品も、高校生の時に読んだ本である。カトリック信者であった遠藤周作が、日本人の考え方とキリスト教の考え方の間の矛盾を提起した作品である。時代は江戸時代、キリシタン弾圧の厳しさによって、ポルトガルの宣教師が「転ぶ」（キリスト教を棄てる）ことにならざるを得ない苦しみを描いている。

この作品が発表され、ベストセラーとなった当時、遠藤氏の講演会に参加したことがあった。その折、聴衆の１人からの質問に対して、「この作品で言いたかったことは、最後のページの部分である」と答えられたことを今でも記憶している。もし、この本を読むことがあれば、この言葉を念頭に置いてもよいかと思う。

この著者の作品『海と毒薬』（新潮文庫ほか）も日本人の行動、考え方について興味深い内容を示しているので、一読の価値がある。

There both, I thought, the eagle and myself
Did burn; and so intense the imagined flames,
That needs my sleep was broken off.

出典: *Canto IX.*, *lines* 29－31, "DANTE'S VISION, The Vision of Purgatory" translated by Henry Francis Cary and illustrated with the designs of Gustave Doré (New Edition), CASSELL & COMPANY, Limited. 製本番号 895 より中 哲裕氏提供.

【書名索引】

（「執筆者名と頁数」を示す）

＜あ・ア行＞

赤頭巾ちゃん気をつけて　中 69
赤と黒　平野 11
赤西蠣太　平野 13
赤目四十八瀧心中未遂　奥田 8
あなたのなかのサル――霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源　岡本 20
「甘え」の構造　川上 17
あらたま　佐藤 49
医学と仮説――原因と結果の科学を考える　岡本 22
育児の百科　土井 36
１Ｑ８４　須田 63
一本の道　佐藤 49
愛しのチロ　垣田 53
いのちをはぐくむ農と食　丸山 72
今さら聞けない科学の常識――うろおぼえを解消する１０２項目　鈴木 75
ウィトゲンシュタイン　Berducci 54
宇宙＝１、２、３ … 無限大　戸田 33
ウッふん　川崎 46
馬の脚　川上 16
海と毒薬　鈴木 76
うらおもて人生録　福原 39
裏の木戸はあいている　平野 13
英文法の疑問――恥ずかしくてずっと聞けなかったこと　須田 62
オイラー、リーマン、ラマヌジャン　平野 13
沖で待つ　奥田 8
奥の細道　中嶌 60
おくのほそ道――現代語訳／曽良随行日記付き　戸田 31
お言葉ですが…　川上 17
お時儀　川上 16
オセロー　中 68
オックスフォード大学・ケンブリッジ大学の入試問題――あなたは自分を利口だと思いますか？　戸田 34

オッベルと象　平野 15
男は匂いで選びなさい　川崎 47

＜か・カ行＞

外国人による日本論の名著　川上 17
鍵　川上 16
架空取引　平野 12
確率論とその応用　平野 14
陰の季節　奥田 9
語る身体・見る身体　Berducci 55
カミとヒトの解剖学　川端 43
鴨川ホルモー　原口 19
硝子戸の中　平野 10
カラマーゾフの兄弟　平野 11,　岡本 20
華麗なるギャツビー　原口 19
考えるヒト　川端 43
巌窟王　中 67
漢字と日本人　川上 16
完訳 三国志　川端 44
擬似科学入門　井戸 27
城の崎にて　井戸 24
旧暦で読み解く日本の習わし　戸田 32
虚人たち　福原 39
虚数の情緒――中学生からの全方位独学法　土井 37
吉良上野介を弁護する　戸田 33
金閣寺　中川 65,　中 70
銀河鉄道の夜　平野 14
苦海浄土――わが水俣病　岡本 22
くさいはうまい　川崎 46
草の花　井戸 25
暗い旅　奥田 8
グレート・ギャツビー　原口 19
決断力　川崎 46
剣客商売シリーズ　鈴木 75
見仏記　原口 18
項羽と劉邦　須田 62

孔子　須田 63
坑夫　福原 38
告発封印　平野 11
凍える牙　奥田 9
心の概念　Berducci 54
心の声――媒介された行為への社会文化的アプローチ　Berducci 54
ご冗談でしょう、ファインマンさん　戸田 32,　垣田 51
小僧の神様　平野 13
国家　平野 12
ことばと文化　川上 17
５分でたのしむ数学５０話　丸山 71
困ります、ファインマンさん　戸田 32
ゴリオ爺さん　平野 11
怖い絵　原口 18
コンチキ号漂流記　垣田 52
今日の芸術――時代を創造するものは誰か　岡本 23

＜さ・サ行＞

坂の上の雲　佐藤 50
細雪　川上 16
作家の値うち　福原 39
差別と日本人　原口 19
さぶ　平野 13
さらば愛しき女よ　奥田 9
されどわれらが日々――　中 69
三国志　上谷 40，川端 44
三銃士　中 67
三四郎　須田 62
紫苑物語　井戸 25
鹿男あをによし　原口 19
死者達　中嶌 56
自然現象と物理法則のあいだ――物理の本質は公式だけではわからない　室 41
実験医学序説　鈴木 75
知っておきたい日本の名字と家紋　戸田 32
失敗の本質――戦場のリーダーシップ編　中嶌 61

失敗の本質――日本軍の組織論的研究　中嶌 58
自分の感受性くらい　井戸 27
下山事件　平野 12
春琴抄　川上 16
潤一郎訳源氏物語　川上 16
将棋の子　岡本 23
商社審査部２５時――知られざる戦士たち　平野 12
少将滋幹の母　川上 16
正法眼蔵　中 70
食糧問題ときみたち　丸山 72
新ウイルス物語――日本人の起源を探る　佐藤 48
神曲　平野 14,　中 67
審判　中川 64
森林がサルを生んだ――原罪の自然誌　平野 10
森林の思考・砂漠の思考　佐藤 48
水滸伝　川上 17
水滸伝と日本人　川上 17
数学ガール　土井 35
数学的センス　土井 37
図解雑学シリーズ　丸山 72
スティル・ライフ　井戸 26
砂の器　前澤 74
砂の女　井戸 24
清潔はビョーキだ　川崎 46
整数　平野 13
生命の意味論　岡本 21
生命とは何か　岡本 21
世界の十大小説　平野 11
世界の中心で、愛をさけぶ　須田 63
零戦燃ゆ　前澤 73
戦争と平和　中嶌 60
全東洋街道　奥田 8
漱石傑作講演集　平野 11
漱石の夏休み　川上 17
続　５分でたのしむ数学５０話　丸山 71

続・仏像のひみつ　原口 19
素数の音楽　平野 13
その数学が戦略を決める　川端 44
それから　須田 62

＜た・タ行＞

大学教授コテンパン・ジョーク集　川崎 47
第三の大国・日本　土井 36
大導寺信輔の半生　川上 16
タテ社会の人間関係――単一社会の理論　中嶌 59
旅人――ある物理学者の回想　戸田 32
ダブリン市民　中嶌 56
タンパク質の一生――生命活動の舞台裏　中川 64
地獄の道化師　川崎 47
「縮み」志向の日本人　川上 17
知的生産の技術　土井 37
チボー家の人々　中 68
超常現象の心理学――人はなぜオカルトにひかれるのか　井戸 28
チロ愛死　垣田 53
沈黙　鈴木 76
月と六ペンス　井戸 26
伝える力　室 42
伝える力２　室 42
土神と狐　平野 15
椿姫　中 67
罪びと　平野 12
寺田寅彦随筆集　井戸 26
ドイツ・イデオロギー　前澤 73
東京大空襲――昭和 20 年 3 月 10 日の記録　中川 65
道元禅師　中 69
道楽と職業　平野 11
徳川家康　佐藤 49
どくとるマンボウ青春記　前澤 74
ドサ健ばくち地獄　福原 38
翔ぶが如く　前澤 73
ドレの「神曲」　平野 14

トンデモ超常現象９９の真相　井戸 28
＜な・ナ行＞
虹いくたび　中 69
20 世紀をつくった日用品――ゼム・クリップからプレハブまで　土井 36
日本語の作文技術　井戸 28
日本人の身体観の歴史　川端 43
日本で「一番いい」学校――地域連携のイノベーション　丸山 72
日本の黒い霧　平野 12
日本美術応援団　原口 18
日本文化論の系譜　川上 17
人間椅子　川崎 47
人間の建設　土井 35
猫と庄造のおんな　川上 16
ノルウェイの森　須田 63
＜は・ハ行＞
灰色のノート　中 68
πの歴史　川端 45
白鯨　平野 11
働くということ　平野 11
８７分署シリーズ　奥田 9
白骨花図鑑　垣田 52
果てしなき探究――知的自伝　岡本 21
花さき山　平野 14
早すぎた発見、忘られし論文――常識を覆す大発見に秘められた真実　川端 43
パラドックス！　川端 43
手巾　川上 16
東と西の語る日本の歴史　中嶌 57
ひかりごけ　垣田 51
非線形科学　戸田 34
羊の歌――わが回想　前澤 74
ひとごろし　平野 13
フェルマーの最終定理　石森 30，前澤 74
深川安楽亭　平野 13
不完全性定理――数学的体系のあゆみ　岡本 21

不思議の国のトムキンス　戸田 33
武士道　川上 17
仏像のひみつ　原口 19
物理数学の直観的方法――理工系で学ぶ数学「難所突破」の特効薬　室 41
不道徳教育講座　土井 35
プラトンの『国家』　平野 12
粉飾決算　平野 12
文章読本　川上 16
ボヴァリー夫人　平野 11
僕って何　中 69
ボクの音楽武者修行　戸田 34
母性社会日本の病理　中嶌 59
ボルヘスの「神曲」講義　平野 15
本が好き、悪口言うのはもっと好き　川上 17

＜ま・マ行＞

マークスの山　奥田 9
麻雀放浪記　福原 38
まちがったっていいじゃないか　土井 37
町奉行日記　平野 13
卍　川上 16
名字と日本人――先祖からのメッセージ　戸田 32
無門関提唱　中 70
目に見えないもの　戸田 31
モウビー・ディック　平野 11
樅ノ木は残った　平野 13
門　須田 62
モンテ・クリスト伯　中 67

＜や・ヤ行＞

約束の地　奥田 9
谷中村滅亡史　岡本 22
屋根裏の散歩者　川崎 47
やまなし　平野 15
夕焼　佐藤 49
逝きし世の面影　中嶌 57
夢十夜　平野 10

ユリシーズ　中嶌 56
夜と霧――ドイツ強制収容所の体験記録　中 68
＜ら・ラ行＞
理科系の作文技術　井戸 28，室 42
理系のための研究生活ガイド――テーマの選び方から留学の手続きまで　佐藤 48
龍　川上 16
ルイズ――父に貰いし名は　岡本 23
レイテ戦記　前澤 73
レーン最後の事件　鈴木 76
歴史が面白くなる東大のディープな日本史　室 42
レディ・ジョーカー　奥田 9
レトリック感覚　井戸 27
論語　須田 63
論文捏造　石森 29
＜わ・ワ行＞
若きウェルテルの悩み　中川 64
吾輩は猫である　平野 10
私が殺した少女　奥田 9
私です物語　平野 13
＜英字＞
Grammar in context 1 and 2　Berducci 55
ＪＲ全線全駅下車の旅――究極の鉄道人生　日本縦断駅めぐり　戸田 31
Kon-Tiki: Across the Pacific by Raft　垣田 52
Love Story　須田 63
“Surely You're Joking, Mr. Feynman!”: Adventures of a Curious Character　垣田 51
Ｘの悲劇　鈴木 76
Ｙの悲劇　鈴木 76
Ｚの悲劇　鈴木 76

【人名索引】

（「執筆者名と頁数」を示す）

＜あ・ア行＞

アインシュタイン，アルベルト（1879-1955）　岡本 21
相沢理（1973-）　室 42
赤瀬川原平（1937-）　原口 18
秋山真之（1868-1918）　佐藤 50
秋山好古（1859-1930）　佐藤 50
芥川龍之介（1892-1927）　平野 10,　川上 16
阿佐田哲也（色川武大のペンネーム 1929-1989）　福原 38
朝日新聞科学グループ　鈴木 75
安部公房（1924-1993）　井戸 24
甘糟幸子（1934-）　垣田 52
網野善彦（1928-2004）　中嶌 57
荒畑寒村（1887-1981）　岡本 22
荒木経惟（1940-）　垣田 53
アリストテレス（384-322 B.C.）　口絵 2
李御寧（1934-）　川上 17
池内了（1944-）　井戸 27
池上彰（1950-）　室 42
池澤夏樹（1945-）　井戸 26
池波正太郎（1923-1990）　鈴木 75
石川淳（1899-1987）　井戸 25
石牟礼道子（1927-）　岡本 22
いとうせいこう（1961-）　原口 18
伊藤野枝（1895-1923）　岡本 23
伊藤留意子（1922-1996）　岡本 23
絲山秋子（1966-）　奥田 8
井上靖（1907-1991）　須田 63
茨木のり子（1926-2006）　井戸 27
色川武大（1929-1989）　福原 39
岩澤健吉（1917-1998）　石森 30
岩波茂雄（1881-1946）　佐藤 49
ヴィゴツキー，レフ・セミョノヴィチ（1896-1934）　Berducci 54
ウィトゲンシュタイン，ルートヴィヒ J. J.（1889-1951）　Berducci 54

ウィリアムソン，オリバー ・イートン（1932-）　中嶌 61
ヴィルギリウス・マロ，プブリウス（70-19 B.C.）　口絵 2
ヴェルディ，ジュゼッペ F. F.（1813-1901）　中 67
梅棹忠夫（1920-2010）　土井 37
エアーズ，イアン　川端 44
江戸川乱歩（1894-1965）　川崎 47
頴原退蔵（1894-1948）　戸田 31
エンゲルス，フリードリヒ（1820-1895）　前澤 73
遠藤周作（1923-1996）　鈴木 76
オイラー，レオンハルト E.（1707-1783）　平野 13，　丸山 71
オヴィデウス・ナソ，プブリウス（43 B.C.-17 A.D.）　口絵 2
大江秀房（1944-）　川端 43
大岡昇平（1909-1988）　前澤 73
大久保喬樹（1946-）　川上 17
大崎善生（1957-）　岡本 23
大杉栄（1885-1923）　岡本 23
大谷光男（1927-）　戸田 32
大津由紀雄（1948-）　須田 62
岡潔（1901-1978）　土井 35
尾形仂（1920-2009）　戸田 31
岡野玲子（1960-）　中 69
岡本太郎（1911-1996）　岡本 23
小川環樹（1910-1993）　川端 44
小澤征爾（1935-）　戸田 34

＜か・カ行＞

岳真也（1947-）　戸田 33
鹿児島誠一（1945-）　室 41
柏木博（1946-）　土井 36
片山恭一（1959-）　須田 63
加藤周一（1919-2008）　前澤 74
金子郁容（1948-）　丸山 72
金田純一郎（1920-2012）　川端 44
カフカ，フランツ（1883-1924）　中川 64
鎌田伸一（1947-）　中嶌 58
ガモフ，ジョージ（1904-1968）　戸田 33

ガロア，エヴァリスト（1811-1832）　土井 35
河合隼雄（1928-2007）　中嶌 59
河合雅雄（1924-）　平野 10
川口澄子（1973-）　原口 19
川端康成（1899-1972）　中 69
菊池聡（1963-）　井戸 28
北杜夫（1927-2011）　前澤 74
北方謙三（1947-）　上谷 40
吉良上野介（1641-1703）　戸田 33
ギラン，ロベール（1908-1998）　土井 36
木下是雄（1917-）　井戸 28，　室 42
クイーン，エラリー（ダネイとリーの共同ペンネーム）　鈴木 76
久米正雄（1891-1952）　平野 10
倉橋由美子（1935-2005）　奥田 8
蔵本由紀（1940-）　戸田 33
車谷長吉（1945-）　奥田 8
グレーリング，A. C.（1949-）　Berducci 54
黒川信重（1952-）　平野 13
ゲーテ，ヨハン・ヴォルフガング・フォン（1749-1832）　中川 64
ゲーデル，クルト（1906-1978）　岡本 21，　土井 35
小泉武夫（1943-）　川崎 46，　丸山 72
孔子（551 頃- 479 B.C.）　須田 63
ゴーギャン，E. H. ポール（1848-1903）　井戸 26
小林勇（1903-1981）　佐藤 49
小林敏也（1947-）　平野 14
小林秀雄（1902-1983）　土井 35

＜さ・サ行＞

斎藤茂吉（1882-1953）　佐藤 49
斎藤隆介（1917-1985）　平野 14
佐伯彰一（1922-）　川上 17
早乙女勝元（1932-）　中川 65
坂井博通（1955-）　川崎 47
佐藤信夫（1932-1993）　井戸 27
施耐庵（1296 頃-1371 頃）　川上 17
シェイクスピア，ウィリアム（1564-1616）　中 68

志賀直哉（1883-1971）　平野 13,　井戸 24
司馬遼太郎（1923-1996）　佐藤 50,　須田 62,　前澤 73
柴田翔（1935-）　中 69
志村五郎（1930-）　石森 30
シュウィンガー，ジュリアン・セイモア（1918-1994）　戸田 32
シュレーディンガー，エルヴィーン（1887-1961）　岡本 21
ジョイス，ジェームス（1882-1941）　中嶌 56
庄司薫（1937-）　中 69
シン，サイモン（1967-）　石森 30,　前澤 74
辛淑玉（1959-）　原口 19
杉之尾孝生（1936-）　中嶌 58
鈴木孝夫（1926-）　川上 17
鈴木秀夫（1932-）　佐藤 48
スタンダール（1783-1842）　平野 11
ソクラテス（470 頃-399 B.C.）　口絵 2

＜た・タ行＞

高島俊男（1937-）　川上 16
高任和夫（1946-）　平野 11
高村薫（1953-）　奥田 9
滝平二郎（1921-2009）　平野 14
武田泰淳（1912-1976）　垣田 51
武光誠（1950-）　戸田 32
竹宮恵子（1950-）　中 67
田島一郎（1912-1985）　平野 13
多田富雄（1934-2010）　岡本 21
立松和平（1947-2010）　中 69
田中正造（1841-1913）　岡本 22
谷口江里也（1948-）　平野 14
谷崎潤一郎（1886-1965）　川上 16
谷山豊（1927-1958）　石森 30
ダネイ，フレデリック（1905-1982）　鈴木 76
ダンテ・アリギエーリ（1265-1321）　口絵 2,　平野 14,　中 67
チャンドラー，レイモンド（1888-1959）　奥田 9
津田敏秀（1958-）　岡本 22
筒井康隆（1934-）　福原 38

坪田一男（1955-）　佐藤 48
デカルト，ルネ（1596-1650）　Berducci 54
デュ・ガール，ロジェ・マルタン（1881-1958）　中 68
デュ・ソートイ，マーカス（1965-）　平野 13
デュマ，アレクサンドル（1802-1870）　中 67
デュマ・フィス，アレクサンドル（1824-1895）　中 67
寺田寅彦（1878-1935）　井戸 26
寺本義也（1942-）　中嶌 58
土居健郎（1920-2009）　川上 17
ドゥ・ヴァール，フランス（1948-）　岡本 20
道元（1200-1253）　中 69，70
と学会　井戸 28
徳川家康（1542-1616）　佐藤 49
ドストエフスキー，フョードル・ミハイロヴィチ（1821-1881）
平野 11，　岡本 20
戸部良一（1948-）　中嶌 58
朝永振一郎（1906-1979）　戸田 32
トルストイ，レフ・ニコラエヴィチ（1928-1910）　中嶌 60
ドレ，ポール・ギュスターヴ（1832-1883）　平野 14

＜な・ナ行＞

永田和宏（1947-）　中川 64
長沼伸一郎（1961-）　室 41
中根千枝（1926-）　中嶌 59
中野京子　原口 18
ナツメ社　丸山 72
夏目漱石（1867-1916）　平野 10，11，15，　井戸 26，　福原 38，　須田 62
西阪仰（1957-）　Berducci 55
西嶋和夫（1919-）　中 70
西田幾多郎（1870-1945）　平野 15
新渡戸稲造（1862-1933）　川上 17
蜷川幸雄（1935-）　中 68
日本経済新聞社　平野 11
野﨑昭弘（1986-）　岡本 21，　土井 37
ノストラダムス，ミシェル・ド（1503-1566）　井戸 28
野中郁次郎（1936-）　中嶌 58，61

野中広務（1925-）　原口 19
乃南アサ（1960-）　奥田 9
＜は・ハ行＞
パーカー，ロバート・ブラウン（1932-2010）　奥田 9
ハイエルダール，トール（1914-2002）　垣田 52
芳賀徹（1931-）　川上 17
林晋（1953-）　川端 43
羽生善治（1970-）　川崎 46
原奈（1946-）　奥田 9
原田甲斐（1619-1671）　平野 13
バルザック，オノレ・ド（1799-1850）　平野 11
日沼頼夫（1925-）　佐藤 48
ヒューストン，ジョン M.（1906-1987）　中嶌 56
平川祐弘（1931-）　平野 15
ファインマン，リチャード・フィリップス（1918-1988）　戸田 32，垣田 51
ファーンドン，ジョン　戸田 34
フィッツジェラルド，フランシス・スコット（1896-1940）　原口 19
フェラー，ウィリアム（1906-1970）　平野 14
フェルマー，ピエール・ド（1601-1665）　石森 30，　土井 35，　前澤 74
福田和也（1960-）　福原 39
福永武彦（1918-1979）　井戸 25
藤田紘一郎（1939-）　川崎 46
藤原新也（1944-）　奥田 8
ブラックバーン，サイモン（1944-）　平野 12
プラトン（427- 347 B.C.）　口絵 2，　平野 12
フランクル，ヴィクトル・エミール（1905-1997）　中 68
ブレイク，ウィリアム（1757-1827）　平野 14
フローベール，ギュスターヴ（1821-1880）　平野 11
ベーレンツ，エアハルト（1946-）　丸山 71
ベックマン，ペートル（1924-1993）　川端 45
ベルナール，クロード（1813-1878）　鈴木 75
ボッカチオ，ジョヴァンニ（1313-1375）　平野 14
ボッティチェリ，サンドロ（1445-1510）　平野 14
ポパー，カール・ライムント（1902-1994）　岡本 21
ホメロス（800 頃-750 頃 B.C.）　口絵 2

ホラティウス・フラックス，クィントゥス（65-8 B.C.）　口絵 2
ボルヘス，ホルヘ・ルイス（1899-1986）　平野 14
本多勝一（1931-）　井戸 28
＜ま・マ行＞
万城目学（1976-）　原口 19
マクベイン，エド（1926-2005）　奥田 9
正岡子規（1867-1902）　佐藤 50
正宗白鳥（1879-1962）　平野 15
松尾芭蕉（1644-1694）　戸田 31，　中嶌 60
松下竜一（1937-2004）　岡本 23
松田道雄（1908-1998）　土井 36
松本清張（1909-1992）　平野 12，　前澤 74
マルクス，カール・ハインリヒ（1818-1883）　前澤 73
みうらじゅん（1958-）　原口 18
三島由紀夫（1925-1970）　土井 35，　中川 65，　中 70
三田誠広（1948-）　中 69
宮沢賢治（1896-1933）　平野 14
村井友秀（1950-）　中嶌 58
村上春樹（1949-）　原口 19，　須田 63
村松秀（1968-）　石森 29
メルヴィル，ハーマン（1819-1891）　平野 11
モーム，ウィリアム・サマセット（1874-1965）　平野 11，　井戸 26
森鷗外（1862-1922）　平野 15
森達也（1956-）　平野 12
森毅（1928-2010）　土井 37
＜や・ヤ行＞
柳田邦男（1936-）　前澤 73
山岡荘八（1907-1978）　佐藤 49
山崎敬一（1956-）　Berducci 55
山下裕二（1958-）　原口 18
山本玄峰（1866-1961）　中 70
山本周五郎（1903-1967）　平野 13
山元大輔（1954-）　川崎 47
山本勉（1953-）　原口 19
結城浩（1963-）　土井 35

湯川秀樹（1907-1981）　戸田 31，32
ユング，カール・グスタフ（1875-1961）　中嶌 59
養老孟司（1937-）　川端 43
横見浩彦（1961-）　戸田 31
横山秀夫（1957-）　奥田 9
吉川英治（1892-1962）　上谷 40
吉田武（1956-）　土井 37
吉田武彦（1930-）　丸山 72

＜ら・ラ行＞

ライル，ギルバート（1900-1976）　Berducci 54
ラマヌジャン，シュリニヴァーサ A.（1887-1920）　平野 13
リー，マンフレッド・ベニントン（1905-1971）　鈴木 76
リーマン，G. F. ベルンハルト（1826-1866）　平野 13
ルカヌス，マルクス・アンナエウス（39-65）　口絵 2

＜わ・ワ行＞

ワイルズ，アンドリュー J.（1953-）　石森 30
ワーチ，ジェームス V.（1947-）　Berducci 54
渡辺京二（1930-）　中嶌 57

＜英字＞

Elbaum，Sandra N.　Berducci 55
Feynman，Richard Phillips（1918-1988）　垣田 51
Fontenoy，Maud（1977-）　垣田 52
Heyerdahl，Thor（1914-2002）　垣田 52
Leighton，Ralph（1949-）　垣田 51
Segal，Erich W.（1937-）　須田 63

【索引補遺】

（「書名と頁数」を示す）

＜運命もしくは賭け＞

水滸伝 17,　ルイズ 23,　城の崎にて 24,　紫苑物語 25,　麻雀放浪記 38,
うらおもて人生録 39,　三国志 40,　完訳 三国志 44,　決断力 46,
徳川家康 49,　項羽と劉邦 62,　翔ぶが如く 73

＜科学／技術＞

素数の音楽 13,　オイラー、リーマン、ラマヌジャン 13,　整数 13,
果てしなき探求 21,　医学と仮説 22,　疑似科学入門 27,　論文捏造 29,
非線形科学 33,　宇宙＝１，２，３ … 無限大 33,
20 世紀をつくった日用品 36,　自然現象と物理法則のあいだ 41,
物理数学の直感的方法 41，早すぎた発見、忘られし論文 43,
その数学が戦略を決める 44,　零戦燃ゆ 73,　実験医学序説 75

＜数と論理＞

素数の音楽 13,　オイラー、リーマン、ラマヌジャン 13,　整数 13,
不完全性定理 21,　医学と仮説 22,　疑似科学入門 27,
フェルマーの最終定理 30，74,　数学ガール 35,　虚数の情緒 37,
数学的センス 37,　パラドックス！43,　π の歴史 45,
５分で楽しむ数学５０話 71,　続　５分で楽しむ数学５０話 71

＜家族／夫婦をめぐる物語＞

カラマーゾフの兄弟 11，20,　育児の百科 36,　死者達 56,　門 62,
チボー家の人々68,　剣客商売シリーズ 75

＜学校と教育／研究＞

目に見えないもの 31,　旅人 32,
ご冗談でしょう、ファインマンさん 32，51,　知的生産の技術 37,
理系のための研究生活ガイド 48，新ウイルス物語 48,
日本で「一番いい」学校 72,　どくとるマンボウ青春記 74

＜神か仏かそれとも…＞

ドレの「神曲」14,　見仏記 18,　仏像のひみつ 19,　続・仏像のひみつ 19,
道元禅師 69,　現代語訳『正法眼蔵』70,　無門関提唱 70,　沈黙 76

＜からだとこころ＞

生命の意味論 21,　超常現象の心理学 28,　不道徳教育講座 35,
育児の百科 36,　考えるヒト 43,　ウッふん 46,　男は匂いで選びなさい 47,
新ウイルス物語 48,　心の概念 54,　ウィトゲンシュタイン 54,
心の声 54,　語る身体・見る身体 55,　タンパク質の一生 64,

実験医学序説 75

＜企業もしくは日本的組織＞

レディ・ジョーカー9,　告発封印 11,　「甘え」の構造 17,
差別と日本人 19,　苦海浄土 22,　第三の大国・日本 36,
坂の上の雲 50,　失敗の本質：日本軍の組織論的研究 58,
母性社会日本の病理 59,　失敗の本質：戦場のリーダーシップ編 61,
レイテ戦記 73,　零戦燃ゆ 73

＜恐怖とミステリー＞

レディ・ジョーカー9,　カラマーゾフの兄弟 20,　下山事件 12,
日本の黒い霧 12,　怖い絵 18,　屋根裏の散歩者 47,　審判 64,
砂の器 74,　Ｘの悲劇 76,　Ｙの悲劇 76,　Ｚの悲劇 76,
レーン最後の事件 76

＜極限状況の人間＞

苦海浄土 22,　砂の女 24,　月と六ペンス 26,　決断力 46,
ひかりごけ 51,　戦争と平和 60,　東京大空襲 65,　夜と霧 68,
レイテ戦記 73,　沈黙 76

＜自伝／評伝のようなもの＞

世界の十大小説 11,　果てしなき探求 21,　ルイズ 23,　寺田寅彦随筆集 26,
目に見えないもの 31,　旅人 32,
ご冗談でしょう、ファインマンさん 32，51,　ボクの音楽武者修行 34,
人間の建設 35,　うらおもて人生録 39,　一本の道 49,
ウィトゲンシュタイン 54,　奥の細道 60,　どくとるマンボウ青春記 74

＜純愛あるいは愛欲＞

赤目四十八瀧心中未遂 8,　沖で待つ 8,　赤西蠣太 13,　春琴抄 16,
華麗なる（グレート・）ギャツビー19,　草の花 25,　三四郎 62,
それから 62,　Love Story 63 ,　若きウェルテルの悩み 64,　椿姫 67,
オセロー68,　虹いくたび 69

＜職業と労働＞

道楽と職業 11,　働くということ 11,　将棋の子 23,　月と六ペンス 26,
論文捏造 29,　20 世紀をつくった日用品 36,　坑夫 38,
大学教授コテンパン・ジョーク集 47,　理系のための研究生活ガイド 48,
一本の道 49

＜食をめぐる話題＞

くさいはうまい 46,　いのちをはぐくむ農と食 72,　食糧問題ときみたち 72,
剣客商売シリーズ 75

＜青春と回想＞
暗い旅 8,　銀河鉄道の夜 14,　将棋の子 23,　スティル・ライフ 26,
自分の感受性くらい 27,　ボクの音楽武者修行 33,　数学ガール 35,
人間の建設 35,　まちがったっていいじゃないか 37,　坑夫 38,　三四郎 62,
ノルウェイの森 63,　若きウェルテルの悩み 64,
されどわれらが日々――69,　どくとるマンボウ青春記 74,　羊の歌 74
＜善または美＞
プラトンの『国家』12,　花さき山 14,　銀河鉄道の夜 14,　春琴抄 16,
怖い絵 18,　日本美術応援団 18,　見仏記 18,　仏像のひみつ 19,
続・仏像のひみつ 19,　今日の芸術 23,　自分の感受性くらい 27,
孔子 63,　金閣寺 65
＜旅と冒険＞
全東洋街道 8,　ＪＲ全線全駅下車の旅 31,　おくのほそ道 31,
ボクの音楽武者修行 34,　コンチキ号漂流記 52,　奥の細道 60
＜「知」の引き出し＞
世界の十大小説 11,　漢字と日本人 16,　寺田寅彦随筆集 26,
知っておきたい日本の名字と家紋 32,　虚数の情緒 37,　知的生産の技術 37,
数学的センス 37,　作家の値うち 39,　自然現象と物理法則のあいだ 41,
伝える力 42,　伝える力２42,　歴史が面白くなる東大のディープな日本史 42
パラドックス！43,　英文法の疑問 62,　５分で楽しむ数学５０話 71,
続　５分で楽しむ数学５０話 71,　図解雑学シリーズ 72,
今さら聞けない科学の常識 75
＜動物のいる光景＞
吾輩は猫である 10,　森林がサルを生んだ 10,　鹿男あをによし 19,
あなたのなかのサル 20,　城の崎にて 24,　育児の百科 36,　愛しのチロ 53
＜匂い立つ香り＞
ウッふん 46,　くさいはうまい 46,　男は匂いで選びなさい 47
＜肉と骨＞
赤目四十八瀧心中未遂 8,　ひかりごけ 51,　白骨花図鑑 52,
タンパク質の一生 64
＜ふしぎな力＞
水滸伝 17,　鹿男あをによし 19,　紫苑物語 25,　超常現象の心理学 28,
トンデモ超常現象９９の真相 28
＜不条理の世界＞
谷中村滅亡史 22,　砂の女 24,　審判 64,　東京大空襲 65,　夜と霧 68,

ドイツ・イデオロギー73,　沈黙 76

＜文化／文明と世界観＞

全東洋街道 8,　森林がサルを生んだ 10,　漢字と日本人 16,
「甘え」の構造 17,　日本美術応援団 18,　あなたのなかのサル 20,
旧暦で読み解く日本の習わし 32,　第三の大国・日本 36,
まちがったっていいじゃないか 37,　π の歴史 45,
森林の思考・砂漠の思考 48,　逝きし世の面影 57,　ドイツ・イデオロギー73

＜文章／論文術＞

レトリック感覚 27,　日本語の作文技術 28,　理科系の作文技術 28,
論文捏造 29,　作家の値うち 39,　伝える力 42,　伝える力２42,
Grammar in context 55,　英文法の疑問 62

＜歴史と人物＞

樅ノ木は残った 13,　谷中村滅亡史 22,　吉良上野介を弁護する 33,
三国志 40,　歴史が面白くなる東大のディープな日本史 42,　完訳 三国志 44,
徳川家康 49,　坂の上の雲 50,　東と西の語る日本の歴史 57,
戦争と平和 60,　失敗の本質 : 戦場のリーダーシップ編 61,　項羽と劉邦 62,
孔子 63,　道元禅師 69,　翔ぶが如く 73

初版 編集後記

富山県立大学図書館では、2008 年 10 月より「県立大学 読書マラソン」という取り組みを開始しました。学生の皆さんに本に親しみ、読書力を高めて、幅広い教養を身につけてほしいと、図書館の出入り口付近の一角に「県立大学 読書マラソンコーナー」を設置したものです。専門書に限らず、話題の本や皆さんの希望を反映した図書を集めたスペースとなっています。

一方、富山県立大学生活協同組合でも、これまでに「読書マラソン」企画に取り組んできました。組合員が本を 1 冊読み終えたら、「読書カード」に感想文を書き込みます。その読書カード 3 冊分と引き換えに、生協での図書購入の割引券をもらえるという仕組みです。大学 4 年間に 100 冊の読破（読書カード 100 枚の執筆）を大目標にしています。

本学における読書推進活動の名称を、図書館と生協の双方が「読書マラソン」に統一したのは、皆さんに楽しみながら多くの図書を読んでもらいたい、というねらいからです。「読書マラソン」への参加申し込みは、生協のカウウンターで受け付けています。なお、申込用紙は図書館にも置いてあります。奮ってエントリーしてみてください。

こうした「読書マラソン」の取り組みを機会に、学生時代に数多くの良書と出会ってほしいという願いを込めて、本学の教養教育を担当する教員全員が、それぞれ学生の皆さんにお薦めしたい図書を紹介するために、この小冊子を作成しました。紹介された図書の中には、現在品切れのものも含まれますが、図書館での貸し出しや再版の折に手にする機会もありうることから、あえて掲載しています。

魂をふるわせる 1 冊の本に出会うことは、生涯の友人を得ることに匹敵するといわれます。世の中に氾濫する出版物の大海の中にあって、この小さな冊子が皆さんの図書選択の羅針盤として利用されるならば幸いです。

なお、この冊子のタイトルは、冒険小説『宝島』などの作品で知られるイギリスの作家 R. L. スティーヴンソンの随筆“VIRGINIBUS PUERISQUE [vəːdʒínibəs pjuərískwi] (For Girls and Boys)”を典拠としたものです。

2009 年 2 月　　岡本　啓 記

第２版 編集後記

図書館および生協の「読書マラソン」のために推薦図書を挙げてほしいという呼びかけに対して、自分の趣味を少し披露してみようかな、というくらいの軽いノリで応じた教員も多かったのではないかと思います。あまり肩肘を張りすぎずに書いたことも、学生たちにはよかったかもしれません。有り難いことに執筆者たちの予想を上回る反響をいただき、刷り上げた 1200 部のほぼすべてを配布し終えるや、ほどなくして第２版の編集と発行を企画することとなりました。将来のフルモデルチェンジを睨みながら、今回はマイナーチェンジの増補改訂版となりました。

改訂版を手にしてまず目にとまるのは、ギュスターヴ・ドレの版画が入ったことでしょう。本冊子にふさわしい版画を厳選して、中哲裕さんが資料を提供してくださいました。その他、推薦図書の書名等の太字化や「索引補遺」（別名：おもしろ索引）の項目追加など、いくつか変更を試みました。これらの試みが学生諸君の読書意欲を引き出す方向に少しでも作用すれば幸いです。

第２版では新しく 36 冊を超える図書が推薦されています。忙しい合間を縫って、新たに原稿を寄せていただいた教員諸氏の熱意と見識には頭が下がります。この 36 冊については、初版にも増して、学生たちの嗜好や必要性に立った観点から選択されているように思われますが、どうでしょうか。

ところで、推薦図書の書名を見て、教員の中には「あ、この本なら私も挙げたかった」という、先を越された悔しさを味わった向きもあるのではないでしょうか。愛読書を挙げるというのは、自分の内面を一部なりとも公開することになりますが、同時に「私はこの本のことを知っているんだ」と宣伝することにもなります。あまりこの種の思いが強すぎると、学生への推薦という当初の目的から逸脱してしまいますが、この種の虚栄心や競争心も、将来予定される本冊子のフルモデルチェンジに向けて推薦リストを吟味するよい刺激になることでしょう。（私自身は、かつて高校生の頃、クラスメートと毎月の読書冊数を競ったことを思い出しました。）

ここに挙げられた推薦図書には、推薦者が最近読んで感銘を受けたものもあれば、若い頃に感動して以来の愛読書となっているものもあります。いずれの場合も、今の学生に薦める場合、時代や経験の違いを考慮すべきことはもちろんで、本冊子でもこの条件は満たされているものと信じます。しかし、これは翻って、学生たちと接する際にも通ずることかもしれません。私たち教員は、よいものは時代の趣味を超えて若い人の心をつかむという信念を持つと同時に、伝える対象が埃を被っていないか絶えず省みる謙虚さを持ち合わせていないといけないでしょう。（ここでは、私自身の授業のことを問わないでくださいね。）

2010 年 2 月　　中川 佳英 記

第３版 編集後記

「学生諸君に少しでも本を読んでもらいたい、そこでブックガイドを作ろう」という動機から、2009 年２月に教養教育全教員が学生への推薦図書をリストアップして作られた小冊子「VIRGINIBUS PUERISQUE」ですが、このたび無事に第３版を出すことができました。編集担当者としてほっとしているところです。

第２版から変わった点として、以下のことがあげられます。

(1) 新たに加わったメンバーのページの追加

(2) 教員の似顔絵イラストの挿入

(3) 各メンバーの推薦図書・推薦文の一部変更

(1)に関しては、第２版刊行後、新たに３名の教員が教養教育に加わりました。彼らにも図書を推薦してもらい、「教養教育全教員によるブックガイド」という形式を今回も達成することができました。またそれに伴い、退職された教員による推薦図書は、（削除することなく）現任教員のページの後に移動させ、第２版そのままの形で掲載してあります。

(2)に関しましては、イラストが得意な石森勇次さんに全員の似顔絵をお願いし、各教員のページ先頭部に挿入しました。親しみやすさが大きく向上したのではないかと思っております。

(3)については、第２版の内容の書き換えを望んだ教員もおりましたので、その点に対応いたしました。

本冊子も 100 ページに達し、リストアップされている図書は、見出しとしてあがっているものだけで 150 を超えています。学生の皆さんの心に琴線に触れるものが間違いなく含まれていることでしょう。気軽にこの小冊子を開いてください。紹介されている図書を通じて新たな世界に触れ、精神の成長につながったとなれば、編集担当者としてはこの上ない喜びです。

2013 年 2 月　　井戸 啓介 記

（全国大学生活協同組合連合会『読書のいずみ』114 号より許可を得て転載）

VIRGINIBUS　PUERISQUE

（若き人々のために）

――「読書マラソン」への誘い――

〔非 売 品〕

発行日　2009 年　2 月 27 日　初　版

2010 年　2 月 26 日　第 2 版

2013 年　2 月 28 日　第 3 版

発行者　富山県立大学 工学部 教養教育

（代表　中川 佳英）

〒939-0398 富山県射水市黒河 5180

URL　http://www.pu-toyama.ac.jp/kyoyo